

戦国非情 結城氏・多賀谷氏 伝 第一部 (NO1~12)

結城氏は藤原秀郷を祖とし、秀郷の5代後、一族の一人が武蔵国大田（埼玉県太田市）に移住し大田太夫と称した。大田太夫から4代後、大田正光が下野国・小山（栃木県小山市）に移住し小山正光を名乗った。関東有数の豪族・小山氏の祖である。

小山正光は常陸国八田（茨城県下館市八田）の豪族・八田宗綱の娘・寒河尼を継室（後妻）に迎え、三男・朝光を得た。寒河尼は正光に嫁ぐ前、源頼朝の乳母であった。

1180年、頼朝は平家打倒の旗を掲げ挙兵するも敗れ、安房国（千葉県南部）に逃れた。此の地で再起を図るが、彼我の兵力の差は歴然としている。このとき頼朝の宿舎を寒河尼が14歳になったばかりの我が子・朝光を伴って訪ね、朝光を頼朝の家臣に加えるよう申し出た。頼朝は願いを聞き届け、さらに朝光の烏帽子親となった。これを以て小山氏は頼朝に与力の証とした。

※ 正光の長男は朝政。このとき正光、朝政は御所の警護で京都にいた。夫の留守の場合、権限は正室に移る。寒河尼の行動は、夫・正光の意思である。つまり小山一族が頼朝方についたことを公にしたことに他ならない。

寒河尼の尽力で頼朝は関東有数の豪族、小山氏と八田氏の兵力を得て巻き返しに成功した。鎌倉政権を樹立後、小山氏と八田氏（後の宇都宮氏）は有力御家人に取り立てられた。頼朝は寒河尼の恩義に報い、朝光を結城郡の地頭に任じた。朝光は小山氏から独立し結城氏を名乗り、初代となった。

※ 八田氏（後の宇都宮氏）・・・藤原北家の流れ。（藤原氏には北家、南家、京家、式家がある）これとは別に八田氏の祖は上毛野氏とする説もある。
上毛野氏・・・崇神天皇第一皇子・豊城入彦命を祖とする豪族。

ともあれ源頼家の奥州の阿部氏征伐（前9年の役。1051～1063）に功があった八田宗円が宇都宮二荒山神社（下野一宮神社）の別当職に任じられ、宗円の孫・朝綱（八田宗綱の嫡男。寒河尼の兄）が宇都宮氏を名乗ったのが始まりとされている。

※ 源頼家は頼朝嫡男の頼家（鎌倉幕府2代将軍）ではなく、源頼光（948～1021）の次男（生没年不詳）。歌人として名高い。

結城氏系譜

初代 朝光（ともみつ）
2代 朝広（ともひろ）
3代 広綱（ひろつな）
4代 時広（ときひろ）

- 5代 貞広 (さだひろ)
- 6代 朝裕 (ともすけ)
- 7代 直朝 (なおとも)
- 8代 直光 (なおみつ)
- 9代 基光 (もとみつ)
- 10代 満広 (みつひろ)
- 11代 氏朝 (うじとも)
- 12代 持朝 (もちとも)
- 13代 成朝 (しげとも)
- 14代 氏広 (うじひろ)
- 15代 政朝 (まさとも)
- 16代 政勝 (まさかつ)
- 17代 晴朝 (はるとも)
- 18代 秀康 (ひでやす)
- 19代 直基 (なおもと。秀康 4 男。嫡男・忠直は松平氏を名乗る)

鎌倉末期、4代時広(享年 24 歳) 5代貞広(享年 21 歳) が若くして病死。6代朝裕は南北朝の乱で、北朝方武将として戦死。享年 28 歳 (1336 年)。7代直朝も同じく北朝方武将として戦死。享年 18 歳 (1343 年)。

相次ぐ当主の夭折で結城家は衰退した。8代直光は直朝の弟で、やはり北朝方として働き、功があった。3代続いた功績を足利尊氏に称えられて所領を増やされた。

尊氏の 4 男・基氏が鎌倉公方として下向し、上杉憲頭(憲頭の伯母が尊氏の母)が関東管領として復帰すると、憲頭の強引な手法に関東領主は反発し、鎌倉府に反旗を翻した。

※ 直義(尊氏の弟)が尊氏と争ったとき、(観応の擾乱) 憲頭(当時関東管領。上野国・越後守護職)は直義に与力し、尊氏に与力した宇都宮氏綱、板東平氏(畠山国清、河越直信、高坂重信、江戸氏ら)と争った。争いは尊氏が勝利し、直義は降伏した。(後に毒殺される)

戦後処理で、尊氏は憲頭の関東管領職と守護職を剥奪し、信濃に追放した。

尊氏方として働いた関東武将に恩賞として、畠山国清に関東管領職、宇都宮氏綱に上野・越後守護職を与えた。河越直信、高坂重信らに、それぞれの領地の守護職を与え、自治権を認めた上で鎌倉府への協力を求めた。世に薩埵山の盟約と言われている。

※ 薩埵山盟約 静岡県薩埵山での直義軍との戦い後、尊氏と尊氏陣営についた板東平氏を含む関東武将との間でかわされた盟約。

尊氏の死後、基氏は腹心だった上杉憲頭を呼び戻し、畠山国清から関東管領職を、宇都宮氏綱から上野、越後守護職を返上することを求めた。

※ 憲頭は尊氏に追放される前、基氏の後見役であった。

関東管領職返上を拒否した畠山国清を討伐して関東管領職を剥奪し、宇都宮氏綱を屈服させ、守護職を奪って、上杉憲頭に戻したのである。さらに河越直信、高坂重信に守護職返上を求めた。薩埵山盟約の反故である。

上杉憲頭に不満を抱いた武蔵平一揆（河越氏、高坂氏、江戸氏ら武蔵平氏一族の同盟）が蜂起し、宇都宮氏綱が加わり、さらに南朝残党である新田義宗（義貞 3 男）、脇屋義治（義貞の甥）もこの機会を捉えて蜂起した。

南朝残党が加わったことにより、幕府は関東諸侯に憲頭支援を要請し、甲斐武田氏、相模平一揆（相模国の平氏一族の同盟）、小山政義（小山氏 11 代当主）らが鎌倉府方として戦い、乱は鎌倉府によって鎮圧された。（武蔵平一揆の乱。1368 年）

この戦で新田義宗は戦死、脇屋義治は出羽国へ逃亡。乱の首謀者であった河越直信は伊勢国へ逃亡し、武蔵平一揆は消滅していった。宇都宮氏綱は許されたが、二年後（1370 年）死去。嫡男の基綱が後継となった。

尚、鎌倉公方・足利基氏は武蔵平一揆の前年（1367 年）に病没（享年 28 歳）。上杉憲頭はこの戦いのさなか、陣中で病死している（享年 62 歳）。

鎌倉公方は 9 歳の氏満、関東管領職には憲頭の 3 男・能憲が継いでいた。

宇都宮氏と小山氏は関東の有力大名としてライバル関係にあった。武蔵平一揆の乱の後、宇都宮氏は衰退し、小山氏が関東最大の勢力となった。この事態を氏満は嫌った。どこの大名であれ、強大な大名の出現は鎌倉府の関東支配に不都合であったからである。

宇都宮基綱と小山政義が所領をめぐって争い（1380 年）、双方多数の死傷者を出した。ことに宇都宮方は当主基綱が戦死した。これ以上小山氏の勢力拡大は鎌倉府、関東管領にとって脅威になる。さらに小山氏は将軍・義満に誼を通じていた。密かに将軍職を狙う氏満には放置できない。基綱の戦死の報に鎌倉公方・足利氏満は小山政義討伐を決意した。

戦いは鎌倉府と小山義政に移った。1381 年、鎌倉府が勝利し、義政は降伏して出家したが、翌年には再度決起して鎌倉府に抵抗した。同年、鎌倉府に責められ義政は自害（享年 33 歳）、嫡男の小山若犬丸は逃亡の末、追い詰められ自害（1396 年）、若犬丸の二人の子も捕えられ

処刑された。小山家嫡流は途絶えた。

この間、結城氏は9代基光と10代満広は武蔵平一揆では参戦の記録は見当たらないが、小山政義の乱では鎌倉府に与力している。

宇都宮氏、板東平氏は衰退し、小山氏は消滅した。(後に結城満広は弟・泰朝に宗家・小山氏を継がせて再興させている) 関東の有力領主が鎌倉府に屈服し、没落していくなか、結城氏は小山氏を傘下に組み入れ、鎌倉府重臣として、下総守護職として絶頂期を迎えた。

鎌倉府が有力武将の力を削ぎ、支配力を強めた東国は室町幕府の影響力が及ばない独立国家の様相を帯びてきた。やがて鎌倉公方は将軍職への野望を抱くようになった。当然幕府は鎌倉府を警戒するようになる。関東支配を果たした氏満は幕府に不満を持つ大内氏(義弘。大内氏25代当主)と謀り、義満に退陣を迫る軍を上洛させようとしたが、関東管領・上杉憲春(憲頭の子)が諫死をもって説得したことにより思いとどまった。

鎌倉公方系譜

| | | | |
|----|--------------------------------|-----------|---------------|
| 前職 | 足利義詮 <small>(後に室町2代将軍)</small> | 1336~1349 | |
| 初代 | 足利基氏 | 1349~1367 | |
| 2代 | 足利氏満 | 1367~1398 | |
| 3代 | 足利満兼 | 1398~1409 | |
| 4代 | 足利持氏 | 1409~1439 | 永享の乱で自刃 |
| 5代 | 足利成氏 | 1449~1455 | 幕府と対立し古河へ逃れる。 |

古河公方(こがくぼう)

| | | |
|----|------|-----------|
| 初代 | 足利成氏 | 1455~1497 |
| 2代 | 足利政氏 | 1497~1512 |
| 3代 | 足利高基 | 1512~1535 |
| 4代 | 足利晴氏 | 1535~1552 |
| 5代 | 足利義氏 | 1552~1583 |

古河公方は5代で終焉

足利5代将軍・義量が18歳で死去すると、継ぐべく子はなく将軍職は空職となった。鎌倉公方4代持氏は強く将軍職を望んだが、6代将軍は義量の父、4代将軍・義持の弟・義円(後の義教)が就いた。持氏は義教の将軍就任に不満を示し、義教もまた持氏を嫌った。

持氏は将軍職への野心を捨て切れず、義教討伐の機会を窺っていたのだが、関東管領・山内

上杉氏の憲実（憲頭の曾孫）は持氏に幕府に従うように諫言した。が、持氏は聞き入れず、逆に憲実を疎んじた。身の危険を感じた憲実は鎌倉を去り領国上野国に帰国した。持氏は憲実の無断帰国を謀反の決起のためと断じ、憲実討伐の軍勢を送った。

※ 上杉一族のなかで有力なのは鎌倉山内に館を置く山内上杉氏と鎌倉扇谷に館を置く扇谷上杉氏であった。そのなかでも山内上杉氏は上杉一門の筆頭格で、代々関東管領職を務めた。後に山内、扇谷は争い、上杉氏衰退の原因となった。

※ 山内上杉・・・尊氏の叔父・上杉憲房の嫡男・憲頭が初代。

※ 扇谷上杉・・・憲房の弟・重頭が初代。

持氏の挙兵をとらえ、将軍・足利義教は持氏討伐を憲実に命じた。鎌倉公方（足利持氏）対関東管領（上杉憲実）、幕府との争いになった（永享の乱）。

永享の乱で結城氏朝（結城氏 11 代当主）、嫡男の持朝（12 代当主）は鎌倉公方方についた。だが争いは幕府の支援を得た上杉憲実方の勝利に終わり、持氏と嫡男義久は鎌倉永安寺で自刃した（1439）。永享の乱によって鎌倉府は断絶した。（1439 年～1499 年の間）

義教は空位となった鎌倉公方に我が子を就けようとしたのだが、足利持氏の旧臣、結城氏朝と持朝、次男朝兼ら結城一族と多賀谷一族が持氏の遺児、春王丸、安王丸を擁立して、結城城にたてこもり幕府に反乱を起こした。結城氏の反乱も上杉勢と幕府軍によって鎮圧され、首謀者の氏朝、持朝、朝兼は討死、春王丸、安王丸は斬殺された。（1441 年結城合戦）

このとき、足利持氏 4 男・万寿丸（後の成氏 3～4 歳）も囚われており、兄同様の運命にあったが、処分が下される前に將軍義教が赤松満裕に殺害されたため、赦免された。結城氏朝 4 男・七郎（重朝、後の成朝、2～3 歳）は落城の際、多賀谷氏家、（33 歳）高経兄弟に抱きかかえられ常陸国太田（茨城県太田市）の佐竹氏に逃れた。氏家が七郎を養育したとされている。（多賀谷伝より）

※上杉勢の大將は 上杉清方（憲実の弟）で、憲実は持氏自刃の悔悟から出家している。

多賀谷氏の祖は道智頼意で、頼意の子・頼基とその三子・光基（初代）が多賀谷郷に移住して多賀谷姓を名乗ったことから始まったとされている。鎌倉幕府の歴史書・吾妻鏡では頼朝上洛の先導隊に弓の名手として多賀谷小三郎が記されている。鎌倉の御家人であったが、鎌倉幕府滅亡後、多賀谷郷（現埼玉県田ヶ谷）は小山氏の領地であったことから、小山氏の有力家臣として存続したと思われる。小山義政が鎌倉公方・足利氏満に反旗を翻し滅亡した後、その所領を小山氏の分家、結城氏が引き継いだことにより、結城氏の家臣となった。結城家でも歴代、重きをなし、結城四天王（多賀谷氏、水谷氏、山川氏、岩上氏）の筆頭格とされていた。多賀谷氏 8 代政朝のとき、結城氏 10 代当主満広の実子・満義（後の光義）

を養子に迎え、我が娘を嫁がせ、9代当主とした。

※ 満広は小山氏を継いだ弟小山泰朝の子を養子に迎え、11代当主としている。結城合戦で戦死した結城氏朝、その人である。

結城合戦のとき、多賀谷氏当主は光義であった。光義は実家の結城氏についたのである。光義は戦死したものの、その子・氏家（10代当主）高経（氏家の弟）は結城七郎（元服しての重朝。後の成朝）を伴って佐竹氏に逃れた。

※ 結城氏朝は小山泰朝の実子。結城満広は養父。多賀谷光義は結城満広の実子。多賀谷政朝は養父。

結城落城より10年後、鎌倉府が再興され、足利成氏が鎌倉公方5代となった。鎌倉府滅亡後、関東は混乱が続き、その抑えとして鎌倉府の必要性を越後信濃守護の上杉房定（清方の次男）によって幕府に進言されたのである。鎌倉公方は関東諸侯の推薦により成氏が就いた。成氏の復活にともない、結城七郎こと成朝（重朝から改名）も復活、結城氏13代当主となった。結城家再興に伴い、多賀谷氏家、高経は結城氏家老となった。

成氏は父・持氏を死に追いやった上杉憲実を憎み、その息子である憲忠とは犬猿の仲であった。鎌倉公方（成氏）と関東管領（上杉憲忠・憲実嫡男）との対立が再発した。

成氏から結城成朝に憲忠暗殺の命令が下り、多賀谷氏家兄弟が高経が憲忠（22歳）謀殺を実行した。（1455。享徳の乱）

憲忠の首は三方に乗せられ成氏に検分された。多賀谷家の家紋はこれを表わす。

憲忠殺害の手柄により多賀谷兄弟は成氏より下妻33郷を与えられ結城家の家臣ながら大名格として扱われた。下妻の領主には氏家になったのだが、後に高経が引き継いだ。高経は成朝の一字を与えられ、朝経に改名した。

上杉憲忠の後任（山之内上杉当主。関東管領職）は弟の房頭が継いだ。

成氏の憲忠謀殺により幕府と鎌倉府は再び対立。幕府（8代将軍・義政）は鎌倉公方・足利成氏討伐に動いた。鎌倉府から東国武將を離反させる調略がすすめられた。工作は結城成朝にも及び、憲忠殺害の朝経に責任を負わせ、上杉氏と結城氏の手打ちが進められたのである。この動きを察知した朝経は反発し、結城成朝（24歳）を殺害した。（1463年）

※氏家は朝経の嫡男・家植（多賀谷氏11代。後に基泰を名乗る）を養子にして隠居しており、多賀谷氏の実権は家植の父、朝経にあった。

結城成朝の後継は成朝の兄、長朝の子・氏広（14代）となった。

※長朝は氏朝の3男、成朝は4男。二人は13代当主の座を争ったが、成朝が就いていた。

一方、幕府（8代将軍・義政）は成氏討伐を上杉房頭、今川範忠（駿河守護職）、上杉房定（越後守護職）に命じ、成氏を鎌倉から追放した。成氏は下総古河（茨城県古河市）に逃れ、ここを本拠地とした。以後、古河公方と呼ばれた。

結城氏 14代当主・結城氏広は足利成氏方の武将として関東管領・上杉房頭らと戦った。だが、幕府に支援された上杉勢の前に、古河公方は苦戦を強いられ、結城氏内部でも結束が乱れ始めた。多賀谷氏、山川氏、水谷氏（みずのやし）らの重臣は独立への道を歩むようになった。

※ 山川氏の祖・山川重光は結城家の狙・結城朝光の庶子。その後も、結城氏と山川氏は互いに養子縁組を組んでいる。

※ 水谷氏・・・関ヶ原の戦いで功を認められ大名となる。後に備中松山藩の藩主となる。

結城氏の衰退に歯止めがかからないまま。氏広は死去した（享年 31 歳。1481 年）

15代当主に 3 歳の政朝が就いた。補佐役として登場したのが多賀谷和泉守である。（和泉守は朝経の孫か、氏家の孫かは不明）

その和泉守であるが、結城家伝によれば藩政の実権を握り横暴を極めたと記されている。結城家家臣のなかに和泉守派を形成し、家臣は藩主政朝よりも和泉守の下知に従うようになった。多賀谷一族の棟梁と自任する基泰（家植）にとっても台頭してきた和泉守は目障りな存在である。政朝と基泰は共謀して兵を送り和泉守を殺害した。主だった和泉守家臣、結城家中の和泉守派も殺害、追放した（1499 年）。政朝は当主としての権限を取り戻し、以後、積極的な外交・軍事行動で旧領奪還を図った。

政朝と共謀して和泉守一派を排除した基泰も名実ともに多賀谷一族の棟梁となった。基泰もまた領土拡張を進め、政朝と領土争いで衝突している。結城家伝では多賀谷氏は結城四天王の筆頭でありながら、主家に弓を引いた一族として記されている。

※ 結城 4 天王 多賀谷氏、山川氏、水谷氏、岩上氏

※ 多賀谷氏、山川氏、岩上氏は秀康重臣として越前入国。水谷氏は松山藩領主となる。

※ 岩上氏の祖は三浦氏とされている。三浦氏・北条氏と並ぶ名家。北条氏と争って滅亡。

結城政朝は宇都宮成綱（宇都宮 17 代当主）の娘を正室に迎えた。当時の宇都宮氏は武蔵平一揆の乱から復活し関東有数の軍事力を有していた。宇都宮氏と同盟関係を築いた結城氏も勢力を伸張させた。成綱が没し、忠綱（18 代当主）が跡を継ぐと関係が悪化し、政朝と忠綱が争い、結城氏が勝利して、宇都宮氏の所領となっていた旧領を取り戻して結城氏再興を果たした。

政朝は嫡男・政直を後継に指名したが、政直が夭折したため次男・政勝を 16 代とした。3 男・高朝は小山政長（小山氏 16 代当主）の養子になり、小山氏（宗家）の跡を継いだ。（小山氏 17 代当主・小山高朝）

政勝には 1 男 1 女がいたのだが、いずれも夭折し、弟・高朝（小山氏 17 代当主）の 3 男・小山晴朝を養子に迎え 17 代とした。結城晴朝である。

結城氏は代々鎌倉公方（後に古河公方）に仕え関東管領・上杉氏と争い、晴朝も古河公方を傀儡としてきた北条氏（鎌倉幕府の執権北条氏と区別するため、後北条と称される）陣営に属してきたのだが、上杉景虎（謙信）が関東管領に就くと、反北条氏に転じた。

晴朝には跡を継ぐべき男子はなく、宇都宮 21 代当主広綱の次男・朝勝（ともかつ）を養子に迎え当主とした。宇都宮広綱の正室（朝勝の母）は佐竹氏 17 代当主・義昭の娘である。この縁組によって、結城氏、宇都宮氏、佐竹氏の同盟が成立し、小田原の北条氏政に対抗した。

晴朝は豊臣秀吉の小田原征伐（1590 年）に出陣し、所領を安堵された。晴朝はさらに結城家存続を確実なものにすべく、秀吉の養子・秀康（徳川家康次男）を養子に受け入れた（1590 年）。その前年に秀吉に実子・鶴丸が誕生しており、秀康の養子先を捜していた秀吉の意向だった。関東最大の大名徳川家康の次男でもある秀康を結城家当主に迎えたことで、豊臣、徳川の二大勢力が結城家の後ろ盾となり、晴朝にとって願ってもないことであった。

※ 結城朝勝は当主の座を秀康に譲り、実家の宇都宮家に戻った。宇都宮家改易後（後述）は、佐竹氏に身を寄せ、関ヶ原合戦での上杉氏、佐竹氏の連携（西軍）の役割を努めた。大坂の陣（冬、夏）では佐竹氏を離れ、牢人となって大阪城に入り、徳川方と戦っている。大阪城落城の後も生き延びて、晩年は神官として生涯を終えた（1628 年。享年 60 歳）。朝勝の子・光綱（養子）は後に久保田佐竹藩（後述）に仕え、宇都宮氏の家名を佐竹藩に残している。

※ 尚、結城氏系譜に朝勝の名はない。17 代当主・晴朝の後は 18 代当主・秀康と記されている。

※ 関ヶ原合戦（1600 年）で、秀康は西軍の上杉景勝（会津 120 万石。関ヶ原合戦後は米沢 30 万石）、佐竹義宣（常陸 54 万石。関ヶ原合戦後は出羽久保田 20 万石）を封じ込む役目を果たし、その功により下総結城 10 万石から 67 万石に加増されて越前北の庄の領主となった。

秀康は結城姓を名乗っていたが、嫡男・^{ただなお}忠直は松平姓を名乗ったため、晴朝は秀康の5男・^{なおもと}直基を養子として結城姓（19代当主）を継がせた。

直基は後に勝山藩3万石（1624年）、大野藩5万石（1635年）に加増移封されている。直基も後に松平姓を名乗り、実質的には秀康によって結城家は絶えた。結城家の祭祀は直基の流れを継ぐ、松平前橋藩によって継承されている。

多賀谷氏の系譜。

初代 光基（みつもと）

2代～7代は略

8代 政朝（まさとも）

9代 光義（みつよし）

10代 氏家（うじいえ）

11代 家植（いえたね、基泰）

12代 家重（いえしげ）

13代 重政（しげまさ）

14代 政経（まさつね）

15代 重経（しげつね）

16代 宣家（のぶいえ。下妻多賀谷氏。佐竹宣家）

三経（みつつね。下総太田多賀谷氏）

※ 下妻多賀谷氏の宣家が本流であるが、下妻多賀谷氏は改易となり、消滅。以後、傍流の下総太田多賀谷氏の三経が多賀谷氏を継いだ。

17代 泰経（やすつね）

18代 経政（つねまさ）

11代の^{いえたね}家植（^{もとやす}基泰）のとき、一門のライバル多賀谷和泉守を殺害し、一門の棟領としての立場を確立した。家植は前述のように本領下妻から周辺に進出し、やはり旧領回復にむけて進出する結城氏との紛争があった。また古河公方の内紛（父・^{まさうじ}政氏と嫡男・^{たかもと}高基の争い）では結城政朝は高基方として、（政朝、高基双方の正室が宇都宮^{しげつな}成綱の娘）、多賀谷家植は政氏方として争っている。

※ 古河公方の内紛は高基の勝利。

関東は古河公方（前身は鎌倉公方）と関東管領・山内上杉氏との対立が長らく続き、関東豪族も両者の争いに翻弄されながらも、古河公方と関東管領・上杉氏の双方が長期にわたる戦いで消耗し弱体化すると、彼の地を奪い。勢力拡大を図るしたたかさを持っていたのである。

ともあれ多賀谷氏は以前、臣従していた結城氏を始め、周辺領主と争いながら、下妻城、城下町を整備して、周辺地域に進出していった。

だが、小田原北条氏（氏綱、氏康）の勢力拡大が進むと、関東諸侯（上杉氏、宇都宮氏、結城氏、佐竹氏、多賀谷氏）は反北条氏を鮮明にして立ち向かった。対立関係にあった結城氏と多賀谷氏が和解したのも、この頃であった。

多賀谷氏が最盛期を迎えたのは15代重経のときで、下妻20万石と多賀谷家伝に記されている。秀康が当主となったとき、結城家は10万1000石であるから、遥かに凌駕している。小田原征伐（1590年）には結城晴朝、宇都宮国綱、佐竹義宣は小田原城（北条氏居城）へ攻撃をしかけ、その功により所領と地位を安堵された。

多賀谷重経は病気を理由に参陣は遅れたものの、秀吉に詫びて、このときは許され所領を安堵された。だが、文禄の役（秀吉の朝鮮出兵。1592年）で病気を理由に参加しなかったため、減封された。（10万石前後か）

重経の嫡男が虎千代。元服して左近大夫光経。左近の烏帽子親は石田三成。その一字を光とかがえて三経とした。本来なら三経は重経の跡を継ぐべき位置にあったのだが、分家し下総太田（茨城県結城郡八千代町）に居城（陣屋）を築き、移住した。

三経が家督を継げなかった理由は、多賀谷氏と佐竹氏の同盟関係にある。多賀谷氏が結城氏を始めとする周辺勢力、進出を強める北条氏に対抗するために常陸国の強国佐竹氏を頼らざるを得なかった。多賀谷氏は佐竹氏の庇護下で戦国時代の存続を図ったのである。

重経の娘（大寿院）が佐竹氏18代当主義重の嫡男・義宣（19代当主）に嫁し（1580年）、その10年後に義重の4男・宣家（義宣の弟）を養嗣子として迎え、娘（珪台院）と娶わせ、多賀谷氏16代当主とした。嫡男がいるにもかかわらず、佐竹氏より養嗣子を迎えたことは多賀谷氏が佐竹氏に隷属するに他ならないと、左近の周辺は捉えた。家中で重経派（宣家派）と左近派が対立した。

重経にはさらなる課題が課せられていた。秀康が結城家を相続した際、秀吉は多賀谷重経に結城氏に臣従するよう命じていた。結城氏はかつて多賀谷氏の主家である。とはいえ多賀谷氏は独立した大名である。しかも隣接する結城氏とは所領争いもある。石高も多賀谷氏が多い。天下人の命令とはいえ結城氏の家臣に組み入れられことに重経は不満を抱いた。だが逆らえば改易処分となりかねない。

重経は多賀谷家を分裂させることにより、難題を解決しようとした。下妻を本拠とする、本家は佐竹氏から迎えた養子・宣家を当主とし、左近三経を分家として下総太田の領地を分け与えた。

その左近三経を結城氏に仕えさせることにより、秀吉の命令に従った。一方、本家は独立した大名として結城氏との対等な立場を守ることにより、家中の反結城派の家臣（重経派・宣家派）を納得させた。

下妻多賀谷氏（本家。宣家）は佐竹派、下総太田多賀谷氏（分家。左近）は結城派に分かれたのである。

重経が小田原参陣に遅れた理由はこの家中の混乱の收拾するためであった。

文禄の役に出陣しなかったのも、留守中、家中で結城派と佐竹派の騒乱が勃発することを恐れたからであろう。それほど家中の対立は深刻だった。

関ヶ原合戦で下総太田・多賀谷氏（三経）と下妻・多賀谷氏（宣家）は東西に別れた。結城秀康は家康の命令により宇都宮に布陣し、石田方の上杉景勝、佐竹義宣と対峙し、上杉・佐竹勢の関ヶ原参陣を防いだ。三経は秀康の先陣として下野国大田原城（栃木県大田原市）に在陣した。

※ 結城秀康が多賀谷左近三経を先陣とした理由は、左近の寝返り（宗家下妻多賀谷氏への同調）を恐れたからであろう。事実、秀康の養父・結城晴朝が結城家伝を編纂しているのだが、多賀谷氏への記述には不信感が散見される。

この記述は結城家中における多賀谷左近三経の立場の微妙さを浮き彫りにしている。或いは越前多賀谷氏の断絶に影響しているのかもしれない。

下妻・多賀谷氏の宣家は兄である佐竹義宣に属し、石田方に付いた。重経も嫡男左近光経（三経）の烏帽子親を石田三成に頼み、光経を三経としたほどだから三成とは親しい。重経は関ヶ原に向かう徳川方の背後を突く奇襲作戦を進言したといわれている。

だが上杉・佐竹勢は結城秀康と対峙したまま動かなかった。関ヶ原合戦（1600年9月15日）は一日で決着した。

※ 宇都宮国綱（宇都宮22代当主）が太閤検地で虚偽の申告（過少申告）をしたとの理由により秀吉の不興を買い、改易処分となった。宇都宮国綱と繋がりが深い佐竹義宣（国綱の母は義宣の祖父義昭の妹。正室は義宣の父義重の娘）にも嫌疑がかかり、連座処分が下されようとしたが、三成のとりなしにより処分を免れた。その恩義に報いるために家康の命令に背いたとされている。

※ 国綱は宇都宮家再興のため、宇喜多秀家の軍に加わり、朝鮮に出兵し手柄を立てたもの

の、宇都宮家再興は果たせず失意のうち江戸浅草で没した（1670年。享年40歳）。嫡男・義綱は元服後、500石で水戸藩に仕え、その嫡男・隆綱は千石の大身となり、次の宏綱は水戸藩家老を務めた。以後子孫は明治維新まで水戸藩家臣として家名を残している。

関ヶ原合戦の戦後処理が行われた。結城秀康は結城10万1000石から越前福井68万石に移封された。これに伴い三経は下総太田を引き払い、秀康から越前坂北郡の村々の総高32000石を与えられ、柿原郷の領主となった。

下妻多賀谷氏は改易。宣家は佐竹家に戻り出羽国檜山（秋田県能代市檜山）1万石を兄・義宣から与えられた。その佐竹氏は（当主・義宣）常陸54万石から出羽久保田（秋田市）20万石に減封された。

三経の実父・重経は下妻を追放された後、困窮しながら各地を放浪した。重経が以前は下妻多賀谷家に仕え、主家の改易後は佐竹家に仕官した旧臣に出した手紙が残っている。文中の六郷とは、旧知の佐竹氏前当主・佐竹義重（18代）の隠居の地。

※ 六郷・・・現秋田県仙北町美郷町

「御国替以来、方々乞食仕り候へ共、がしにおよび候間、旧冬ふと六郷へ参り候老期と云い、不弁の式と云い、何共書き尽くし難く存じ候」

（国を召し上げられて以来、方々を乞食となってさまよい、餓死しそうになり、昨年冬、ふと旧知（佐竹義重）を頼って六郷を訪ねました。老齢といい、極貧といい、なんともその悲惨さは筆舌に尽くし難いのです）と窮状を訴えている。

この旧臣は重経を哀れみ、酒と肴を送り届けた。20万石の大名が物乞い同然に零落して秋田を訪ねたという噂は藩内に広まり、重経は此の地も追われるように去った。最後は末子（三男）の茂光（彦根藩士）を頼って近江に行き、彼の地で没した（1618年）、享年61歳と多賀谷系譜（家伝）に記されている。

終。

参考資料 下妻市史（茨城県下妻市） 関城町史（茨城県真壁郡関城町）

結城系譜 多賀谷系譜 福井県史 福井市史

他 資料

平成26年7月14日

資料編纂 長谷川 勲

戦国非情 結城氏・多賀谷氏伝 第二部 (No.13~33)

結城譜代家臣と徳川家臣団

結城秀康の死。

関ヶ原の戦いの翌年、慶長6年（1601年）7月、越前北ノ庄に入国した結城秀康は68万石の大大名に相応しい城郭と城下町の建設を急いだ。およそその完成に5年を要した。さらに秀康は大量の家臣団を召し抱えた。家臣団の総数は497家に達し、内訳は1万石以上が11家、五千石以上6家、千石以上74家、6百石以上43家、3百石以上164家、百石以上187家、百石未満12家でその合計は55万石4千石であった。差し引き12万6千石が藩主分とすれば、68万石の大大名の体面を保つには苦勞したであろう。

家臣団の主な出身地は三河78家、下野^{しもつけ}65家、遠江^{とおとうみ}50家、美濃37家、尾張30家、武蔵27家、越前19家、相模18家、駿河17家、甲斐16家、上野^{こうぜいの}13家、近江10家、信濃9家、常陸8家、摂津^{せつつ}、河内^{かわうち}が6家、丹波^{たんば}、伊勢が4家、若狭^{しもふさ}3家、下総2家、その他（不明を含む）が75家。

千石以上の大身は三河25家、美濃14家、尾張10家、下野9家、遠江、武蔵が4家、相模、駿河、近江が3家、越前、甲斐、下総、常陸が2家、上野、信濃、丹波、若狭が1家、その他（不明を含む）4家で計91家。

1万石以上は三河の4家。本多富正（36750石）、今村盛次^{もりつぐ}（25050石。35050石との記載もあり）、永見右衛門^{ながみ うゑもん}（15350石）、清水丹後^{たんご}（11020石）である。尾張は2家、久世^{くせ}但馬^{たじま}（10000石）、落合主膳^{しゅぜん}（10000石）。下総も2家、多賀谷左近（32000石）、山川讚岐守^{さぬきのかみ}（17000石）である。以下、美濃の吉田修理^{しゅり}（14000石）。甲斐の土屋左馬助^{さまのすけ}（38000石）。若狭の江口石見^{いわみ}（10000石）で計11家である。

下野は結城氏の旧領国であるから当然としても、三河、遠江が多数を占めるのは徳川家との係わりからである。

本多富正は秀康が豊臣秀吉の養子（人質）として大阪で暮らしていたとき、徳川家から遣わされた側小姓である。今村盛次は三河の出身、家康に召しだされて御納戸役（將軍家の金銀、衣服、調度の出納を管理する役）を務め、秀康越前入国に伴い、付家老となった。

土屋左馬助の父、金子定光^{さだみつ}は武田信玄、勝頼に仕え、織田方との戦いで討ち死にした侍大将である。2歳だった左馬助は家臣に養われ、成人後、徳川家に出仕した。家康の小姓を務めたが、実直な性格を見込まれ秀康の側近に登用された。

多賀谷左近を除き、3万石以上の大身はいずれも徳川ゆかりの家臣である。一方、結城氏譜代重臣では多賀谷左近（下総）が32000石、結城一族の山川讃岐守（下総。山川氏の祖、山川重光^{しげみつ}は結城氏の祖、結城朝光^{ともみつ}の庶子）が17000石、岩上左京（下野）が4000石、水谷刑部^{みずのやぎょうぶ}（下野）水谷兵部^{みずのやひょうぶ}（下野）が1000石である。多賀谷、山川、岩上、水谷の4家は結城四天王と称された武将である。いずれも旧領地の石高であり、越前移封^{いほう}にともなって加増されたものではない。

前述のように結城譜代家臣（下野、下総、その他）71人のうち、1000石以上は上記5人を含めて8名しかいない。250石~600石が13人、200石が22人、150石が19人、100石が6人、50石が3人である。

※数字は結城秀康給帳（家臣俸禄控。福井市史）より。

結城譜代家臣は移封にともなつての加増はほとんどなかった。そのために越前への赴任を辞退した下級家臣も少なからずいた。秀康は結城姓を名乗っていたが、越前北ノ庄藩を支配したのは三河出身を中心とした徳川家臣団で結城譜代重臣は権力の中樞から外されていた。

江戸、京、大坂を結ぶ要害の地、府中城主には本多正富（三河）、丸岡城主には今村盛次（三河）、大野城主には土屋左馬助（甲斐）、勝山代官には林長門^{ながと}（三河。9840石）が配され、徳川家臣団主導であったことが一目瞭然である。辛うじて越前加賀国境の坂北柿原郷に多賀谷左近（下総）が配された。

慶長 10 年 5 月 1 日 (1605 年 6 月 17 日)、徳川秀忠に対して征夷代將軍宣下^{せんげ}。同時期、結城秀康も権中納言^{ごんちゅうなごん}に昇任した。その間、越前の国造りに精力を注ぐかたわら、慶長 11 年に幕府から江戸城普請手伝いを命じられている。これには多賀谷左近があたった。それを終えると禁裏普請^{きんり}の惣督^{そうとく}(責任者)を命じられ、さらに家康が伏見城を離れる (※伏見城は徳川將軍の京都での居城) 伏見城在番役^{ざいばんやく}(留守役)、翌 12 年正月から駿府城改築の助役と (本多富正があたる) 幕府から次々と公役を課せられた。

諸大名を総動員した徳川方の城普請、禁裏造営、河川改修、道路工事の、いわゆる家康の天下普請に北ノ庄藩も駆り出されたのである。秀康はこの時期多忙を極めた。この頃より秀康の健康は悪化し、業病^{ごうびょう}に苦しむことになる。

家康は病床の秀康を案じ、昵懇^{じっこん}の公家衆や僧侶を見舞いに遣わせたのだが、面会^{かな}が叶わなかった。病状悪化もさることながら、腫れものが顔を覆い、鼻が削られる異様な容貌を人前に曝すことを嫌ったのである。

衰弱も著しく、書状の末尾にも花押でなく印判^{かおう}を用いて、「病気なので印判を用いている」と相手方に詫びている。秀康の病気は徳川一門だけでなく、諸侯、宮廷にも知れ渡り、諸侯からの見舞いが相次ぎ、宮廷でも後陽成天王^{ごようぜい}が神楽^{かぐら}を舞わせて平癒^{へいゆ}を祈祷していたとの記録が残っている。

慶長 11~12 年 (1607 年) の冬は伏見城で養生した。秀康は帰国を望んだのが、家康が病に伏せっている秀康を案じ、嚴寒の北国下向を避け、春まで待つようにと勧めたのである。

慶長 12 年 3 月 1 日 (1607 年 3 月 28 日)、秀康は伏見を発ち北庄への道についた。此の日、夕方より天候が急変し、雷鳴轟^{とどろ}く豪雨となり、不吉の前兆となった。着城日の記録は無い。帰国後、病状は一進一退を繰り返しながら慶長 12 年閏 4 月 8 日 (1607 年 6 月 2 日) 死去した (享年 34 歳)。

翌9日永見右衛門（前述。24歳。15350石）が、11日土屋昌春（前述。27歳。3万8千石）が殉死した。

※ 福井県郷土史叢書（雑記の意）の秀康家臣履歴に右衛門の母は家康の従妹と記載されている。又秀康の生母・於万の方（長勝院）は三河国氷見吉英の娘である。右衛門の父は永見吉治。吉英と吉治の関係を示す記録は見当たらないが、極めて近い親族であったであろう。

さらに本多正富らの重臣も追隨する動きを見せた。この事態に幕府はすぐさま対応した。

4月16日、秀忠より、24日には家康から、正富に、25日日には幕閣の本多正純から重臣あてに殉死を固く禁ずる指示がなされたのである。その内容は「殉死は沙汰の限りであり、生きて若い忠直（11歳）を守り立てることこそ忠節である。もしこの旨に背くなら越前は肝要の地であるから別の人間に与え（北ノ庄藩改易）、子孫まで絶家にする。殉死した者は一族すべて成敗（死罪）に処す」という厳しいものであった。（越前松平家譜より）

※ 秀康の生母・於万の方は家康の正室・築山殿の付女中であった。家康は築山殿の恪気を恐れ於万の方を側近の本多重次に預け、重次の計らいで於万の方は浜松の中村家で於義丸（秀康）を生んだ。秀康（10歳）が養子（人質）として豊臣家に入ると、重次嫡男の仙千代（12歳。後の成重。丸岡藩主）が側小姓として同行した。まもなく成重に代わって富正がその役目を努めた。富正は秀康の最古参の側近であった。

※ 本多富正の父・本多重富は重次の兄。富正と成重は従兄弟。

※ 慶長20年（1615年）7月、武家諸法度が制定されたが、この時点では殉死禁止は明文化されておらず、口頭での禁止のみであった。明文化したのは天和3年（1683

年)、5代将軍、綱吉の時である。

北ノ庄藩の殉死は幕府からの厳しい通達により、永見右衛門とその介錯人^{かいしゃくにん}である田村金兵衛^{きんべい}、土屋昌春と同、長沼四郎右衛門^{しろううえもん}のみで止まった^{とど}。

多賀谷左近が死去したのは秀康の死から100日後の慶長12年7月21日(1607年9月12日)であった(享年41歳。31歳との説有り・多賀谷家伝より)。病死とされている。

左近三経の死について、多賀谷家譜では本多富正による毒殺の可能性を示唆しているが、その証拠となる資料は存在しない。論拠として考えられるのは、

「関ヶ原合戦以降、徳川家では豊臣家壊滅の機会を狙っていた。北ノ庄藩は親豊臣派大名と目されてきた。それを抑える役割を本多富正が担っていた。秀康の死去後、富正は親豊臣派を一掃するために、最初に多賀谷左近三経を毒殺した」であろう。私見である。

結城秀康譜代家臣(親豊臣系家臣団)を排除するために幕府の謀略、本多正富の謀略が開始された。それが「久世騒動」である。

久世騒動

(久世騒動は後に柿原郷多賀谷氏の廃絶に関わってくるので詳しく記述したい)

北ノ庄藩は秀康嫡男、忠直^{ただなお}が就いた。12歳である。藩政は本多正富、今村盛次らの重臣に委ねられた。父の死から4年後の慶長16年(1611年)9月、忠直(16歳)は秀忠の三女、勝姫(11歳。母は秀忠正継室、江^{ごう}。三代将軍家光は同母弟)を正室に迎えた。徳川宗家との絆を強め、親藩筆頭として越前は盤石と思われたのだが・・・。
※ 忠直と勝姫の間に一男二女がいる。光長(1615年出生)、亀姫(1617年出生)、鶴姫(1618年出生)

慶長17年、越前を揺るがす大騒動が勃発した。きっかけは百姓間の刃傷沙汰であった。後世「久世騒動」と呼ばれ、直々に大御所(家康)、将軍(秀忠)の裁定を仰ぎ、世間の耳目を集めた大騒動であった。

久世騒動についての記述は資料によって異なる。まったく正反対の記述が横行している。ここでは福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編「福井県郷土叢書 忠直年譜」を採用したい。込み入った事件であり、資料を読むだけで経緯を理解することは困難である。「久世騒動」の背景として以下の事を念頭に入れていただきたい。

北ノ庄藩（68万石）は結城藩（10万石）を母体に、方々から家臣を募った寄せ集め集団であった。その寄せ集め集団を統率していたのが結城秀康であった。だが結城秀康という統率力に優れた藩主が死去し、幼い忠直が後継となると、藩政は重臣に委ねられた。なかでも徳川系家臣団のリーダーであった本多富正（府中城主）に権力が集中した。

幕府との折衝にも富正があたっていた。勝姫の輿入れの際、府中の本多富正の館で休息し、お齒黒の儀式を行った。筆を入れたのは富正の妻で、勝姫にお伴して北ノ庄城に入城した。将軍秀忠がこれほど富正を重用するには理由がある。江戸から遠く離れた北国越前の北ノ庄藩を徳川家の支配下に置くため、幕府は本多富正にその役割を与えていた。将軍家は勝姫輿入れの儀式を利用して本多富正に徳川系家臣団筆頭のお墨付きを与えたのである。

だが、本多富正の権力集中に反発する一派が存在していた。結城秀康に召し抱えられた譜代家臣（非徳川系。幕府は彼等を親豊臣系と見ていた）であった。今村盛次（丸岡城主）は徳川系家臣でありながら、富正との対立からその旗頭に担がれた。

藩主忠直は父、秀康同様徳川家への屈折した感情を抱いており、徳川家と親しい本多富正を疎んじる気持ちがあったといわれている。

久世騒動に関与した主だった藩士

本多富正派 本多富正（39000石） 久世但馬守（10000石） 竹島周坊守（4000石）

弓木左衛門（2000石） 上田隼人（600石）

反・本多派 今村盛次（25050石） 中川出雲守（15050石） 岡部自休（1700石）

清水丹後守（11020石） 林伊賀守（9840石） 谷伯耆守（3000石） 広沢兵庫（600石）

石) 落合美作^{みさく} (1000 石) 牧野主殿^{とのも} (2400 石。後に離脱)

当時 18 歳だった藩主・忠直の事件処理に不手際があり、久世一族、及び討手方合わせて 350 人余が命を落とした。騒動は天下に広まり、幕府が裁決に乗り出すという事態に発展した。

久世騒動顛末

家老久世但馬の知行地の民・某(甲)が 諍^{いさか}いの末、町奉行岡部自休の知行地の民・某(乙)を殺害する事件が起きた。このことが表沙汰になり、乙の親族が知行主の岡部自休に訴えた。岡部はこの事を久世但馬に伝え、犯人の引き渡しを求めたが、久世は本多富正、竹島周防などと協議した結果、犯人を 匿^{かくま}い、事件を握りつぶした。

岡部は本多富正と対立していた今村盛次、その同志である清水丹後、林伊賀と相談し、中川出雲から藩主忠直に訴えたようとしたが、本多、竹島がこれを 阻^{はば}んだ。

(忠直の母は秀康側室・中川一元^{かずもと}の娘(清涼院^{せいりょういん})。中川出雲は一元の嫡男。出雲は忠直の叔父にあたる)

岡部は激怒し、「私が訴えても、奸臣^{かんしん}(本多富正)に阻まれて藩主に達しない。私は事の次第を幕府に訴え、奸臣どもの悪事を暴く」と語り、直ちに江戸に向かった。牧野主殿^{とのも}は岡部への加勢を申し出て同行することになった。

岡部、牧野が江戸に発ったことを知らされた忠直はすぐさま人を遣わし、「このような小事で幕府の裁定を仰ぐには及ばない。直ちに戻って久世但馬と対決すれば、理非は明らかになる」と伝えた。両人は藩主の言葉に受け入れ帰国した。牧野は藩主の心を煩わしたことを悔い、高野山に入り剃髪して入道となった。

忠直は但馬に対して速やかに岡部と対決するように命じたが、但馬は命令に従わなかった。久世但馬^{ちゅうぼつ}誅伐が決せられた。

今村盛次、清水丹後、林伊賀ら反本多富正の面々はこの機会を捉え、本多富正の失脚を画策した。久世但馬討伐を本多富正に命じるよう、忠直に進言したのである。本多富正が久世但馬討伐を拒否すれば君命に背いた咎とがにより、本多を失脚させることができる。受け入れれば本多は同志である久世を討伐し、自らも返り血を浴び、一派は分裂するだろう。本多富正一派を失脚させる絶好の機会と捉えたのである。

忠直は今村盛次らの進言を受け入れ、富正に登城を命じたが、富正は盛次らの企てを察し、己が誅伐されることを警戒し、領地の府中から動かなかった。忠直の再度の命令に、身の安全を保証するため、忠直からの人質を賜ることを求めた。人質が渡されたことにより、登城した富正は忠直から久世但馬守上意討ちを命じられ、富正はこれを受け入れた。

慶長 17 年 10 月 18 日（1612 年 11 月 10 日）、本多富正は家臣たちに久世但馬守屋敷を包囲させ、単身屋敷に乗り込み、余人を交えず但馬と面談をした。席上、富正は但馬に自刃を求めたが、但馬は拒否した。会談を終え、富正が帰ろうとすると、久世家臣の木村八右衛門はちえもんらが富正に斬りかかろうとした。但馬はこれを留め、「私の最後は目前に迫っている。私の死後、私の存念を語ることが出来るのはただこの人、本多富正殿を頼るのみである。決して手出しをしてはならぬ」と固く制し、富正を門外に送り出した。

直ちに攻撃が開始された。久世方ではすでに婦女子、老人は脱出しており、屋敷内の屈強な家臣 152 人が応戦した。激しい攻防戦が続いたが、その日は決着がつかず、一夜が明けた。翌朝、屋敷から火の手が上がった。但馬が火を放つように命じ、火中で自刃したのである。すでに家臣の多くは討ち死にしており、残った家臣も但馬の後を追いつ自刃した。久世方には一人の生存者もいなかった。寄手の討死は 207 人とされている。

その日（19 日）のうちに忠直は使者をおくり、弓木左衛門、上田隼人に死を命じた。

二人は自刃し、家臣たちは討手と戦い主人の後を追った。竹島周防は城内の櫓やぐらに監禁

され、あらためて詮議を受けることになった。久世但馬を誅伐した本多富正は咎とがを受けず、失脚を狙った今村盛次らの目論見が狂ったのである。

このとき柿原郷、多賀谷氏やすつねは泰経の代になっていたが、家臣の武者奉行、丹下長左衛門ちやうざえもん

に兵を率いさせ今村盛次の屋敷の警護にあたらせた。盛次の屋敷は本多富正の屋敷に近い。久世方の反撃、あるいは本多富正の襲撃に備えるためである。

越前の騒動は幕府の知るところになり、慶長 17 年 11 月 27 日（1613 年 1 月 17 日）、本多富正、今村盛次らが江戸に呼び出され、江戸城西の丸において、家康、秀忠の立ち会いのもと、土井利勝ら幕閣らによる尋問がおこなわれた。

今村盛次は騒動の発端は久世但馬の罪状を本多富正、竹島周防らが隠ぺいしたことで引き起こされたものであるとして、

「あきらかに理は岡部自休にあり、非は久世但馬にあります。藩主・忠直公も岡部の訴えを受け入れられ久世の罪をお認めになった。しかるに本多、竹島らは忠直公の御意向に背き、訴えを退けたのです。これは本多、竹島らの日頃の驕りからくるもので、若き藩主をないがしろにする不届きな行為に他なりません。お上におかれては厳正な裁きを下さいますようお願い申し上げます」と言上した。

一方、本多富正は「岡部自休が訴える内容は、私はもとより岡部に理があることは承知しておりましたが、久世但馬は武名の高い宿老、今百姓の訴えにより処罰することを見るに忍びなく、そのため久世の側にたって岡部の訴えを聞き入れなかったのです」と弁明した。竹島周防も「越前にお入りになったはじめに、秀康公は『私は国を得て喜んだことが二つある。一つは北陸の要地に^よ抛ることになったこと。二つは有名な士である久

世但馬を家臣に迎えることが出来たことである』と仰^{おっしゃ}って、久世の武勇を感心されて、他の家臣に比べて厚遇されたのです。先君がこのように愛された人物であったため私も尊敬しておりました。事の理非を論ぜず、岡部の訴えを退けたことは先君の思いを

^{おもんばか}慮^{おもんばか}ってのこととございます。このことにより重罪を被ることになるともまったく悔いることはありません」と述べた。

家康、秀忠は裁定を下した。本多富正の失脚を企て騒動に持ちこんだ今村盛次に非があると断じたのである。富正の罪は不問にされ、今村盛次らに処分が下された。尚、竹島周防は罪に問われなかったが、騒動の責任をとり自刃した。

今村盛次（25050 石） ^{いわき}岩城（現福島県いわき市）鳥居氏預け

中川出雲（15050 石） 小諸仙石氏預け

| | |
|----------------|------------------------------------------|
| 岡部自休 (1700 石) | 死罪 |
| 清水丹後 (11020 石) | 仙台伊達氏預け |
| 林 伊賀 (9840 石) | 上田真田氏預け |
| 谷 伯耆 (3000 石) | 改易 |
| 広沢兵庫 (600 石) | 松平丹後 (横須賀藩主・松平重勝 ^{しげかつ} の嫡男) 預け |
| 落合美作 (1000 石) | 紀州藩預け |

丸岡城主であった今村盛次の後任は本多成重^{なるしげ}となった。成重の父・重次^{しげつぐ}は本多富正の

父・重富^{しげとみ}の弟であり (前述)、成重と富正は同年(1572 年生まれ)とされている。成重を推挙したのは富正であった。対抗勢力を排除した富正は北ノ庄藩を牛耳ることになる。これは幕府の意向でもあった。

豊臣家との対決は目前に迫っている。越前の親豊臣勢力を追放し、徳川系家臣でまとめる、これが家康の狙いだった。久世騒動始末もそれに沿ったものであり、ことの理非で裁断を仰ごうとした今村盛次には最初から勝目はなかったのである。

久世騒動が落ち着いた後、家康は本多富正を呼び出した。表向き騒動について叱責したのだが、富正の忠義を (徳川宗家への) 大いに称賛したという。本多富正と幕府は裁決の前から通じていたのである。親豊臣派家臣を駆逐する機会を幕府は探っていた。たまたま北ノ庄藩に久世騒動が勃発した。それを利用したのである。

さて柿原郷・多賀谷左近泰経^{やすつね}は今村盛次の屋敷を防御したが、当主泰経が若年であり、動員されたのみということで重い処分は免れた。但し、多賀谷氏領地から柿原の 881 石と指中村の 771 石が取り上げられ本多富正に与えられている。

富正は柿原郷にも触手を伸ばしていたとされている。忠直は幕府に金津築城を申し出ているが、それは金津に己の居城を構えようとする富正の意図であったと多賀谷家伝は記している。金津城築城は結局実現しなかった。その理由は後ほど述べたい。

※ 多賀谷氏から本多氏に柿原郷、指中の領地が移った年代は、多賀谷左近三経の死後であることは確かだが、時期は不明。だが、三経死後、柿原郷多賀谷氏の領地が大きく削られているのは事実である。後で述べるが慶長 18 年 (1613 年。三経の死から 6 年) に北ノ庄藩は坂北郡に金津奉行を置いている。このことは多賀谷氏の領地

であった坂北郡がすでに北ノ庄藩の支配下になっていることを意味している。

大坂の陣

慶長 19 年 11 月 19 日 (1614 年 12 月 19 日)、大阪冬の陣開戦。親徳川派の本多富正が掌握している北ノ庄藩は本多富正 (府中城主。39000 石) と本多成重 (丸岡藩主。40000 石) が主力となって天王寺近辺に布陣した。二人は松平忠直の家臣 (家老) でありながら家康直々の指揮下に入った。越前兵は大阪城攻撃に加わるが、血気にはやる忠直 (20 歳) は軍令を無視して突撃し、真田幸村指揮下の鉄砲隊に狙い撃ちされ多くの将兵を失った。家康は富正と成重をよびつけ、厳しく叱責した。大阪冬の陣は忠直にとって屈辱の初陣に終わった。

慶長 20 年 4 月 26 日 (1615 年 5 月 23 日)、大阪夏の陣合戦の火蓋が切られた。5 月 7 日、(6 月 3 日)、越前兵は真田幸村勢と激突、幸村を討ち取り、さらに大阪城一番乗りを果たした。淀君と秀頼は翌 8 日、自害。大阪城は炎上、豊臣家は滅亡した。夏の陣で

の越前兵の活躍は称賛された (越前兵が夏の陣で取った首級^{しゅきゅう}3650 は東軍でも群を抜いていた)。

本多富正自身も一番槍を称えられた。冬の陣での雪辱を果たしたのである。恩賞として富正は黄金 50 枚が贈られた。

忠直には家康から名器の茶入れ、秀忠から脇差を贈られ、加増は後日にということであったが、翌年家康が死去したことにより、約束は実現しなかった。

忠直配流処分

夏の陣が終り、豊臣家が滅亡した日から 3 ヶ月後の慶長 20 年 7 月 13 日 (1615 年 9 月 5 日、元号は元和^{げんな}になった。翌元和 2 年 4 月 17 日 (1616 年 6 月 1 日) 徳川家康死去、享年 75 歳であった。忠直の乱行が目立ち始めたのは元和 4 年頃からである。家康という絶対的な存在が消滅し、一時的に幕府の権威に陰りが見えたことも、忠直の乱行を許したのかも知れない。

家康の長男は信康^{のぶやす}。信康の母、築山殿とともに信長への謀反の疑いで、家康によって殺

害、自刃されている。次男は秀康。本来、徳川宗家は秀康が継ぐのが筋だが、秀康は秀吉の養子にだされたと云う理由で、弟の秀忠が継いだ。だが、資質としては秀康が優れ、彼こそ、その地位に相応しいというのが、衆目の一致する所だった。

秀康は権力の非情さを知っている。兄信康は信長の命令とはいえ、父・家康に切腹を命じられた。一時は豊臣家の後継者と目された秀吉の甥、秀次は秀頼が生まれると、遠ざけられ、切腹を命じられた。のみならず秀次の側室、侍女、遺児たちも斬首された。親兄弟といえども、いったん疑惑を与えれば粛清される、それが乱世の掟である。

兄信康の自刃、秀次一族の虐殺を目撃した秀康は権力がもたらす非情さ恐怖を理解していただろう。不満を抱きながらも己の身を守るために家康には逆らわず、弟の將軍秀忠に対立する姿勢も見せなかった。だが、忠直にはそれができなかった。

忠直が不満を抱いたのが尾張家（62万石）、紀州家（56万石）、水戸家（35万石）と北ノ庄藩（68万石）の扱いである。尾張藩の藩祖は家康9男義直、紀州藩は10男頼宣、水戸藩は11男頼房である。

家康の次男だった父、秀康は関ヶ原合戦（1600年）で上杉景勝、佐竹義宣の関ヶ原参陣を防ぐ功があったが、弟の尾張、紀州、水戸の藩祖諸侯は合戦に参加するどころか、生まれてもいない。彼等は甥の忠直よりも年下である。

※ 忠直は文禄4年（1595年）生まれ。義直は6歳下、頼宣は7歳、頼房は8歳下である。

尾張、紀州、水戸藩が御三家として位置づけられ、とくに尾張、紀州藩は將軍の継承権を与えられた。ならば次男である秀康が藩祖の北ノ庄藩も同列に扱われるべきと忠直は思ったであろう。だが、石高こそ三藩を上回るものの、北庄藩は格下に扱われた。

さらに家康の死後（元和2年4月17日。1616年6月1日）、幕府の北ノ庄藩・忠直に対する態度は明らかに変化した。家康生存中の慶長19年の幕府よりの書状では忠直を「越前少将様」と記しているが、元和2年の書状では「越前宰相殿」となっている。同年における義直（尾張藩主）を「尾州宰相様」、頼宣（紀州藩主）を「常陸様」、頼宣（水戸藩主）を「少将様」と記している。自尊心の強い忠直には腹に据えかねたであろう。

忠直が幕府に反抗的な態度を見せ始めたのは元和4年（1618年）からで、23～24歳の

頃からである。この年は病気を理由に参勤せず、元和 6 年の参勤は今庄まで行きながら、体調不良を理由に引き返している。参勤は將軍に対する大名の服属儀礼であり、これを怠るということは、徳川將軍を軽んじる事に他ならない。さらに元和八年、徳川家最大の行事である日光で営まれた家康七回忌法要にも関ヶ原まで行きながら引き返し、参列しなかった。前小倉藩主、細川忠興ただおきもこの事態を前代未聞とし、「御帰り候事成らざる様のご処置これあるべし」と、処分が必要と述べている（細川家史料）。各諸侯も親藩、譜代、外様大名問わず固唾を呑んで幕府の対応を見守っていた。

將軍秀忠にとって忠直は甥であり、娘婿ではあるが不問にすれば幕府の權威が失墜する。秀忠は娘の勝姫に腹心の旗本を遣わし事情を探った。その結果、「忠直、病気にて参列かなわず」として幕府は処分を見送った。

だが、忠直の傍若無人ぶりは改まらなかった。家老の本多富正（府中城主）、本多成重（丸岡城主）ら重臣かんげんの諫言も聞き入れない。あまつさえ成重を手打ちにしようとした。成重は幕府から遣わされた付家老である。処罰すれば幕府への謀反とみなされるであろう。さすがに成重処罰は見送ったものの、永見右衛門うゑもんを怒りにまかせて切腹を命じた。右衛門は秀康の後を追って殉死した先代の右衛門（15350 石）の嫡男である。

忠直の乱行はこれに止まらなかった。日々酒に溺れ、家臣を手打ちにした。そのため家臣たちは忠直に近づこうとしなかった。諫言するものさえおらず。藩政も滞る始末だった。ついには勝姫にまで刃を向け、かばった侍女を切り捨てた。

ここに至って秀忠は忠直処分を決断した。「国中政道も穏やかならず」との理由で忠直の隠居せいしと世子、仙千代（後の光長みつなが）の家督相続の内意を忠直の生母（清涼院せいりょういん）を通じて伝えた。拒否すれば直ちに討伐、二つに一つである。幕府は本気であった。事実、出羽秋田藩の佐竹義宣よしのぶに越前出兵の用意を命じている（秋田藩史料）。加賀藩の前田利常としつねにも密かに忠直追討の内命が伝えられていた（加賀藩史料）。

忠直は覚悟していたのだろう、「本望の至り」と淡々と処分を受け入れた。元和 9 年（1623 年）2 月のことであった。忠直の配流先は豊後府内藩萩原はいる ぶんごふないほんはぎはら（大分市萩原）。元和

9年3月15日（1623年4月14日）越前を去り、途中敦賀に滞在し、鬣を落として一伯と号した。忠直に同行したのは侍女3人と世話をする小者のみで士分の同行は認められなかった。正室勝姫は実子の光長、亀姫、鶴姫を伴い江戸に移った。

忠直は5月2日（5月30日）に敦賀を発ち、同月（日は不明）萩原に着いた。5千石の食い扶持が与えられたが、府内藩と幕府目付けの警護は厳しく軟禁生活を余議されたのである。このとき忠直こと一伯28歳、血気ざかりの青年が68万石大大名から一気に転落して流人の身分に落とされたのである。忠直は萩原で3年暮らし、その後津守

（大分市）に移された。その間、侍女の間に二男二女を儲けた。長男が松千代（後の永見

長頼）、次男が熊千代（後の氷見長良）、長女おくせ（早世）、次女閑（勘とも）である。

忠直は慶安3年9月10日（165010月5日）死去した。享年56歳。

残された遺児は異母兄の光長（忠直の嫡男。後述）が藩主である高田藩（後述）に引き取られた。

※ 松千代と熊千代の母（侍女）は身分が低かったため、祖母方（秀康の母方）の姓、永見氏を名乗った。

北ノ庄藩解体

元和9年（1623年）、北庄藩は9歳の光長が相続した。だが、幕府は幼い藩主では68万石の大藩を治めることは無理と判断した。重臣が補佐するにしても、慶長17年（1612年）の久世騒動のような重臣の対立が再発しかねない。事実、藩政は本多富正が仕切っていたものの、反本多勢力がすべて駆逐されたわけではない。結城譜代家臣も健在である。徳川一門の筆頭として北陸の抑えを北ノ庄藩は担っている。その北ノ庄藩の腰が定まらない様では困るのである。

幕府は翌年の寛永元年（1624年）、忠直の弟、忠昌（秀康次男）を越後高田25万石（25万9千石？）から北ノ庄藩に移封させた。

ここで越後高田藩について触れておこう。前領主は家康の六男、松平忠輝^{ただてる}である。忠輝は川中島藩 12 万石の領主であったが、慶長 15 年（1610 年）越後 63 万石を与えられて 75 万石となり、居城を高田（現上越市）に築いたのである。地勢的に見ると、秀康が治める北ノ庄藩と忠輝が治める高田藩で加賀藩を囲むような形になる。加賀藩を抑え込むために家康の次男と六男を南北に配置したのである。

だが忠輝は家康に疎んじられていた。忠輝の不敵な面魂が嫡男信康に瓜二つで、家康はこれを嫌ったとか、忠輝の傲慢不遜な態度を嫌ったとか伝えられているが真相は不明である。家康は臨終の間際にあっても忠輝の拝謁を許さなかった。

将軍秀忠も幕閣も忠輝に厳しい目を向けていた。幕府のキリシタン弾圧政策にもかかわらず、忠輝はキリシタンと接触していた。幕府の財政運営に辣腕をふるいながらも疑惑をもたれていた大久保長安^{ながやす}（幕府の金山、銀山を統括した。後、失脚する）と気脈を通じていた。忠輝の正室五郎八姫^{いろは}は油断のならぬ伊達正宗の娘であった。これらが警戒されていたのである。

総大将を命じられていた大阪夏の陣に遅参する、将軍秀忠の旗本を無礼討ちにするなど、幕府、将軍をないがしろにする行為が目についた。さらに朝廷に大阪夏の陣戦勝報告のために、家康と参内するところを病気理由に参内せず、目と鼻の先の嵯峨野桂川で舟遊びに興じるなど、家康の面目を貶めることさえおこなった。家康は激怒し以後、忠輝の拝謁を許さなかった。元和^{げんな}2 年 7 月 6 日（1616 年 8 月 18 日）家康の死から間もなく、秀忠は弟の忠輝に改易処分を下した。

忠輝は最初に伊勢国、次は飛騨国、信濃国に流罪され、最後は諏訪高島（諏訪市）^{てんな}で天和 3 年（1683 年）死去した。享年 92 歳、驚くほどの長命だった。

忠輝の改易処分は北ノ庄藩主、松平忠直の配流処分、元和 9 年 3 月 12 日（1623 年 4 月 14 日）の 7 年前の出来事だった。

余談だが、忠直の配流処分の 9 年後の寛永 9 年（1632 年）、3 代将軍家光は実弟の駿府^{すんぶ}

藩（52万石）藩主の徳川^{ただなが}忠長を改易処分とし、その翌年の寛永10年12月6日（1634年1月5日）、自刃に追い込んだ。

この三つの事件は幕府を軽んじる者は、たとえ血筋であっても厳罰に処すとの峻烈な姿勢を天下に示したものであった。

話を松平忠昌に戻す。越後高田藩、松平忠輝の改易後に入ったのが、信濃松代藩（12万石）の松平^{ただまさ}忠昌（結城秀康の次男。兄は忠直）である（越後高田藩75万石は分割され25万9千石を忠昌に与えられた）。元和4年（1618年）のことであった。

その忠昌が前に述べたが寛永元年（1624年）4月、北ノ庄藩主となる。忠昌は北ノ庄を改め福居とした。前藩主の仙千代（忠直嫡男。後の光長）は、越後高田藩に入った。北ノ庄藩と高田藩の国替である。

さらに、北ノ庄藩領であった大野（5万石）を分離し、弟（三男）の松平^{なおまさ}直政に与えた。

同じく勝山（3万石）を（五男）結城^{なおもと}直基に、木本（大野市木本。2万5千石）を（六男）松平^{なおよし}直良に与えた。

※ 秀康は長男忠直、次男忠昌、三男直政、四男吉松（早世）、五男直基、六男直良の男子をもうけた。娘は長州初代藩主毛利^{ひでなり}秀就正室、喜^き佐^さ姫^{ひめ}。

直基は当初、松平姓を名乗らず結城姓を名乗った。これは秀康の遺言である。秀康の養父、結城^{はるとも}晴朝は名門結城氏を残すことを強く願った。晴朝の子供は娘一人で跡を継ぐ男子はいなかった。そのため宇都宮21代当主、^{ひろつな}広綱の次男、^{ともかつ}朝勝を養子に迎えた。この結果、結城氏、宇都宮氏、佐竹氏の同盟が成立したのである（宇都宮広綱の正室は佐竹氏17代当主・義昭の娘、^{なんりょいん}南呂院。結城・宇都宮・佐竹氏は宇都宮氏を軸に姻戚関係を結び小田原北条氏に対抗する同盟を成立させた）。同盟は北条氏の圧力に耐え、名門ではあるが弱小大名（11万石）を存続させる道だった。

だが小田原北条氏の滅亡により、関東の雄となった徳川氏と国境を接するようになると、晴朝は新たな決断をしなければならなかった。天正 17 年（1589 年）、秀吉は待望の後継、鶴松（三才で死去）が誕生すると、有力大名から人質として取っていた養子たちを大阪城から去らせた。彼等は本家に戻れず、新たな養子先を探さねばならなかった。家康の次男、秀康もその一人であった。徳川宗家の後継はすでに秀康の弟、秀忠にとの暗黙の了解が重臣の間にあった。秀康が秀吉の養子となり一時的にせよ豊臣姓を名乗ったことにより、後継の資格を失ったのである。秀康が徳川家に戻れば、秀忠と対立し、徳川家に亀裂が生じる、秀康は他家に養子にゆくより他に道はなかった。

秀康の養子先として名乗りをあげたのが結城晴朝であった。そのために朝勝との養子関係を解消し、宇都宮氏に戻している。晴朝は水戸城主・江戸重通^{しげみつ}の娘鶴姫を養女とし、秀康と鶴姫とを娶とわせ、結城家を秀康に継がせたのである。秀吉、家康に異論のあるはずもない。徳川氏からの脅威を取り去り、秀吉の覚えもめでたいとあれば、結城家の将来は盤石のように見えた。

しかし徳川家の天下になり、結城氏断絶の危機がおとずれた。徳川家の血筋の者は大名跡、松平姓を名乗ることが慣例になったのである。

秀康は結城姓を生涯名乗っていたが、嫡男忠直は松平氏を名乗ることが決定されていた。秀康で結城姓が絶える。このことを憂いた晴朝は秀康に子のいずれかに結城姓を名乗ることを申し入れたのであった。秀康は義父の申出を受け入れた。

秀康は五男の五郎八^{いろは？}の養育を晴朝に依頼し、結城姓を継がせさせた。後の直基^{なおもと}である。

※ 直基は当初、結城姓を名乗っていたが、晴朝の死後、松平姓に復した。御家門としての処遇を得るためである。

話を戻そう。北ノ庄藩は福居藩（後に福井藩）と改称され、68 万石の領地から大野、勝山、木本が外され、丸岡（藩主は本多成重）が独立した。大野藩（5 万石）、勝山藩（3 万石）、木本藩（2 万 5 千石）、丸岡藩（4 万 6300 石）が削られたのである。さらに敦賀郡が幕府領となり（後に小浜藩に編入される）、北ノ庄藩 68 万石は福居藩 52 万 5 千石に削減された。（後に木本藩が返還されて 55 万石となる）

領地の減少ではなかった。家臣団にも激変があった。福居藩は忠昌が連れて来た越後高田藩の家臣団と本多富正が選んだ家臣団で編成された。それ以外の北ノ庄藩家臣の動向だが、多くが光長に従って越後高田藩（25 万 9 千石）に行き、その他の家臣も

直政に従って大野へ、直基に従って勝山へ、直良に従って木本へ赴く者に別れたのである。又、本多成重を頼り、丸岡藩士となった者もいた。

多賀谷一族は室町前期(1390年代)より結城氏の家臣であった。群雄割拠の戦国時代、多賀谷一族は結城氏を離れ独立の道を歩むが、秀康が結城家を相続すると秀吉の命令により、多賀谷左近三経はその家臣となった。左近三経は柿原郷3万2千石を拝領し、結城氏譜代家臣の筆頭格として処遇されていた。だが、三経の嫡男・泰経が元和2年(1616年)19歳で死去すると柿原郷多賀谷氏は改易され、北ノ庄藩直轄領となった。さらに松平忠昌が藩主となると、福居藩(旧北ノ庄藩)の家臣は忠昌の直参と本多富正が率いる徳川系家臣団によって占められた。松平忠昌ぶげんちやう分限帳(家臣の地位、禄高、役職を記した名簿)に柿原郷多賀谷氏の当主・経政つねまさ(泰経の養子。後述)の名はない。柿原郷多賀谷氏は消滅していたのである。柿原郷多賀谷氏の断絶である。

多賀谷氏に不幸な出来事が続いていた。多賀谷左近三経みつねは慶長12年7月21日(1607年9月12日)に死去している。生年は天正6年(1578年。高橋恵美子著「多賀谷氏における家伝」より)だから享年は30歳になる。だが福井県史、金津町史ともに享年41歳としている。その根拠とするのは越前史略(藩史)の記載による。

「慶長十二年七月二十一日 四十一歳ニテ卒ス 邑ノ西ニ葬ル 其子 左近ヲ継グ

後故アリテ祀まつりヲ絶ツ」

(訳) 多賀谷左近三経、慶長12年7月21日(1607年9月12日) 41歳にて死去。柿原郷の西方の地に葬られる。その子 左近を名乗り家督を継ぐ。後に故あり、三経の菩提を弔うことが途絶えた。

とすれば左近三経の生年は1567年(永禄10年)となる。三経の父、重経しげつねの生年が永禄元年(1558年。「多賀谷氏における家伝」より)だから、重経9歳のときの子となる。これには無理がある。やはり享年は30歳であろうか。いずれにしても早死にである。

左近三経の後継は泰経である。泰経についての文献はほとんどない、生年も不明である。家督を継いだとき、おそらく10歳に満たなかったであろう。泰経以外にこどもがあったかどうかは不明である。記述が見当たらない。その泰経は父よりさらに短命であった。多賀谷家伝の記述。

虎千代 左近 忠直公ニ従ヒ大阪御陳高名アリ深手ヲ負フ
元和二丙辰五月七日十九歳ニテ卒 墓下妻多密院ニ在

(訳) 幼名虎千代(多賀谷宗家の嫡男は代々虎千代を名乗る)。元服して左近(左近泰経)を名乗る。忠直公に従い大阪の御陳(陣)にて手柄あり。戦場で深手を負う。元和2年^{ひのえたつ}丙辰五月七日(1616年6月20日)、19歳にて死去。墓は下妻城下の多密院に在り。

※ 大阪夏の陣で左近泰経は首級三十八をあげ、あっぱれ武勲を輝かせた(多賀谷家伝)。首級38といわれる数の真偽はともかく、血気盛りの泰経は戦場で^{とうそう}刀槍を振るい奮戦したのであろう。その結果深手を負ったとの記述である。

父、左近三経の死から9年、大坂夏の陣、豊臣家滅亡の慶長20年閏年5月7日(1615年6月3日)の、まさに1年後である。大阪夏の陣で深手を負ったという記述から、傷の悪化が原因であろうか。19歳の壮健な当主の死、しかも実子はいない。宗家断絶の危機である。重臣たちは右往左往したのであろう。

※ 藩への届け出より以前に泰経は死去していた可能性がある。後継ぎが定まらず、延び延びになりタイミングを凶っての届けとなったのであろう。

^{きゆうきよ}急遽重臣の中から^{つねまさ}養子を立てた。経政である。

多賀谷家伝の記述

虎千代 左近又ハ内記氏 実ハ泰経弟実子ナキニ付養子 故有之跡目不被下流浪
寛永十五戊寅年六月廿八日卒 墓 福井城下乗國寺ニアリ

(訳)

幼名虎千代 左近または^{ないき}内記氏を名乗る 実ハ泰経弟実子なきに付き養子なり。故あ

り跡目を継ぐこと許されず浪人となる。寛永15年^{つちのえとら}戊寅年6月18日(1638年7月

19日) 死去 墓は福井城下の乗國寺じょうこくじにあり。

・・実ハ泰経弟実子ナキニ付養子・・の解釈だが 実は(経政は)泰経の弟で実子なきにつき養子となる とも読める。別の解釈として 実ハ泰経に弟、実子がなく(経政は)養子である とも読める。

いずれにしても経政の出自は不明である。結局、経政の相続は許されず、柿原郷多賀谷氏は断絶した。仮に泰経に実子の後継がいたとしても多柿原郷多賀谷氏が福居藩の家臣として存続することは不可能だった。

慶長 18 年 (1613 年)、北ノ庄藩は坂北郡金津に金津奉行を置き、森宗右衛門そうえもん (千石) を初代奉行に任じている。金津奉行所には鉄砲組 26 人が配置されており、坂北一帯の治安維持、国境の警備、往来の監視が主な任務である。当時、坂井郡は(竹田川の)川東を坂北郡、川西を坂南郡に別れており、越藩史略にも「坂北郡は国の北にして、街道その中にあり、南北の直径金津を郡の中心とする」と記されている。慶長 18 年以降、明治維新まで坂井・吉田郡は北ノ庄藩～福居藩～福井藩の藩金津奉行管理下に置かれていたのである。

慶長 18 年という年は久世騒動の翌年である。むろん左近泰経は健在であった(泰経の死は 3 年後)。この時点で柿原郷を含む坂北一帯は北ノ庄藩の支配下にあったことを示している。柿原郷多賀谷氏は既に坂北一帯の領主ではなかったことを示す重要な記録である。

左近三経の死 (1607 年) に伴い、10 歳の泰経が家督を継いだ時から、柿原郷を含む坂北郡は北ノ庄藩の支配下に置かれるようになったのであろう。柿原郷 3 万 2 千石は左近三経までで、三経の死後、領地の多くが北ノ庄藩直轄領となっていた。

さらに前述のように北ノ庄藩は後に忠昌が越後高田から連れてきた直参と本多富正を頂点とする徳川系家臣団が中心となり、それ以外は排除された。結城秀康、松平忠直、松平光長の北ノ庄藩に仕えてきた藩士 5 百有余名のうち、福居藩に残った旧藩士は本多富正が選抜した 105 名 (家臣禄より) に過ぎなかったのである。

まして柿原多賀谷氏は先の久世騒動で富正の政敵、今村盛次についた。騒動の後始末では関与の度合いが薄く、泰経も若年 (15 歳) であったことから処分は見送られたものの、(あるいは金津奉行設置が処分であったかも知れない) 富正に疎んじられている。松平忠昌、本多富正による福居藩の新体制下に組み入れられることはなかった。

(本多富正は金津に居城を築くことを忠直に願い出ている。忠直が同意していた書状

も残っている)、富正が坂北郡に野望を抱いており、そのことが多賀谷氏を断絶に追い込んだ理由との説もある。だが、富正は己の野心で動く男ではなかった。

※ 忠直騒動の後、北ノ庄藩から丸岡を分離させ本多成重に丸岡藩（4万6300石）を立藩させたのだが、その際、富正にも府中藩（4万5千石）の立藩の話があったのだが、富正は固辞し北ノ庄藩筆頭家老として留まった。

富正が願い出た金津城築城はあくまでも加賀前田藩に対する備えであった。結局、実現しなかったのだが、その理由として加賀前田藩の歴代藩主が徳川家と婚姻関係を結び、脅威が取り除かれたからである。

※ 2代藩主利常としつねの正室が徳川秀忠次女・珠姫たまひめ。（長女千姫。三女勝姫・忠直正室）

その子・光高みつたかが3代藩主となり、光高は水戸藩初代藩主徳川頼房よりふさの4女で徳川3

代将軍家光の養女・大姫おおひめを正室とした。その子・綱紀つなのりが4代藩主となり、家光の異

母弟の保科正之ほしなまさゆきの娘・摩須姫ますひめを正室とした。それ以降も加賀前田藩は徳川家と婚姻関係を結び外様大名ではあるが、徳川家との絆を強めていった。

加賀藩の脅威は薄められ、備えとしての金津城築城は目的を失ったのである。それはとりもなおさず越前加賀国境警備のために配された柿原郷多賀谷氏の存在意義も失われたということでもあった。平時の領地支配は奉行所だけで十分なのである。当主・泰経の死、後継不在によって柿原郷多賀谷氏は断絶に追い込まれた。当然の帰結といえよう。

柿原郷の多賀谷一族のその後はどうなったのだろうか。光長に従って越後高田藩に赴いた者もいた。結城氏を相続した直基なおもとの家臣となった者もいた。祖先の地、下妻に帰郷した者もいた。福井藩士として残った者もいた。武士は捨てたが越前に残った者もいたであろう。

※ 結城秀康分限帳には左近三経以外に多賀谷姓を名乗る家臣として多賀谷権太夫ごんたゆう

（2050石）、多賀谷式部（200石）、多賀谷将監しょうげん（200石）、多賀谷徳千代（150石）、

多賀谷鞠負ゆきえ（150石）の名前が見える。左近三経系多賀谷氏の支族である。

※ 越後高田藩の家臣録に多賀谷内記^{ないき}（1000石）の名前がある。

※ 松平（結城）直基～直矩系家臣団、直政、直良の家臣団については調査中。

跡目を継ぐことを許されず浪人となった経政は不遇の生涯をおくったが、その子、経栄^{つねひで}については短く記述されている。

虎千代 左近修理 松平大和守直矩公ニ仕フ 川越多賀谷家祖

（訳）幼名虎千代。元服して左近修理^{しゅり}を名乗る。松平大和守直矩^{なおのり}に仕えた。川越多賀谷氏の祖となる。

経栄は直基の嫡男松平大和守直矩^{なおのり}に仕え、川越多賀谷氏の初代となった。その子孫は家老職を輩出する家柄となり、家系は明治維新まで続いた。

以上、柿原郷多賀谷氏が廃絶に至った理由と、その行く末である。

尚 柿原の専教寺^{せんきょうじ}は柿原郷多賀谷一族の菩提寺であるが、七世了西^{りょうさい}についての記述がある。これを解説して「戦国非情 結城氏・多賀谷氏 伝」を閉じたい。

「釈了西法師^{しゃくりょうさい}は当初多賀谷左近の二男にて、多賀谷光之助^{みつのみすけ}といふ仁^{ひと}にて候。二十四歳

にて当時第七代^{げんじゅう}の現住（住職）と相成り寺務^{じむ}つつがなく候 処 折悪しく慶長年中多

賀谷城主に兵乱多し、よって近辺の檀中（信徒）三百余人引具し（ひきつれて）罷り出

で候 処、忽ち落城に付、住僧も共に逐電し、当寺も没落し廢寺^{てい}の体と相成るとなん。

その後数年経て、寛永四年（1627年）の秋、住僧^{じゅうそう}（了西）五十五歳、並に一子了光^{りょうこう}

なりしを引きつれ帰山し、専教寺再建の志願これあり候へども、門徒^{おのおの}など各々散乱して、

ようやく五十軒ばかり残りまかりあり、これを取立てわずかに小堂^{いちうぞうりゅう}一字造立し、多賀

谷の菩提を弔はんがため相続しけり」

多賀谷左近三経には泰経以外に子があったという記述はない。当時左近泰経は15歳前後である。とすれば光之助とは重経の二男（左近三経の弟）^{ただつね}忠経のことを指すのであろうか。ただ忠経に関する記述は多賀谷系譜でも見当たらない。多賀谷宗家では左近三経の祖父・^{まさつね}政経、父・^{しげつね}重経、左近三経、嫡男・^{やすつね}泰経、さらに^{つねまさ}経政と^{つね}経の一字を用いている。

光之助は忠経の幼名かも知れない。

※多賀谷家伝に経政の子であろうか僧侶がいたとの記述がある。但しそれにはこう記されている。奥州一族ノ方ニテ早世 奥州一族（佐竹氏）の方にて早世。

この記述から了西と関連付けることは難しい。

慶長年中多賀谷城主に兵乱多しとの記述についてだが、多賀谷氏が外部から攻められたという事実はない。一族内で争いがあったという事実はない。考えられるのは慶長17年（1612年）に福井藩で勃発した久世騒動に多賀谷左近泰経が巻きこまれたという事実である。この騒動で泰経は本多富正と対立する今村盛次についた。その久世騒動で忠経が戦いに加わったという史実はない。まして一揆ならともかく、檀中が武士の争いに加わることはない。あるとしたら柿原郷の支配が多賀谷氏から福居藩金津奉行に移った際、柿原百姓衆と奉行所の間で^{いさか}諍いがあり、一揆騒動に発展し、百姓衆が根城とした専教寺が破却されたかも知れない。

尚、久世騒動に多賀谷氏側で参陣したのは重臣の武者奉行であった^{たんげちやうざえもん}丹下長左衛門である。これらの事実を錯誤しているのではないか。史実に照らし合わせ、専教寺史を解釈すると以下のようなになる。（私見）

「北ノ庄藩で藩を二分する争いが起こった（久世騒動）。本多富正と今村盛次の争いである。多賀谷左近泰経は武者奉行、丹下長左衛門に兵三百余を預け今村盛次の屋敷を守らせた。争いは藩内で収まりがつかず、幕府の裁定を仰いだ。大御所家康、將軍秀忠も直々に裁定に加わり、その結果、本多富正が勝利し、今村盛次一派は越前追放処分を受けた。

争いが決着した後、今村盛次に味方した柿原郷多賀谷氏は窮地に陥り、その翌年、坂北郡は福居藩金津奉行の支配下に置かれた。

柿原郷は多賀谷左近三経、泰経が治めていた頃は穏やかな郷村であったが、金津奉行が差配するようになると何かと不便になり、日々の仕事、暮らしに支障が生じるようになった。たまりかねた百姓衆は専教寺に集まり対策を講じた。その結果、住職の了西を通じて奉行の森宗右衛門に申立書を提出することになった。了西は先代左近三経の弟で忠経、幼名は光之助と称した。24歳のとき出家して了西を名乗った。専教寺7代である。

専教寺は浄土真宗の寺院で、多賀谷左近三経が柿原郷領主となった際、多賀谷氏が菩提寺とした。それまでは柿原郷の小寺であったが、左近三経は伽藍建立、田畑の寄進を通じて専教寺の隆盛に尽くした。了西が7代に継いだのは、そのような経緯からである。了西はそれまでつつがなく寺務を遂行していたのだが、百姓衆の依頼を引き受けることにより立場が一変した。

奉行・森宗右衛門は百姓衆の申立書は了西の扇動によるものとし、その背後に金津奉行設置に不満を持つ柿原郷の多賀谷一族が存在すると捉えた。申立ては即座に却下。吟味されることなく却下されたことに百姓衆は怒り、徒党を組み奉行所に押し掛け、申立てを取り上げるよう迫った。

これらの行為を奉行は一揆、強訴ごうその類とし追い払った。怒った百姓衆は専教寺に集合し奉行所を襲わんと氣勢をあげた。それを察知した宗右衛門は先手を打って専教寺を襲い、破却した。さらに了西を騒動の首謀者として捕えようとしたが了西は加賀国に逃れた。

専教寺再建は奉行所が許さなかった。元和2年丙辰げんな ひのえたつ（1616年6月20日）、当主左近泰経が死去すると柿原郷多賀谷氏は廃絶となり、家臣各々が各地に離散した。一族が去った柿原郷で、専教寺は朽ち果てた。一揆騒動の経緯から領民は多賀谷一族を祀ることさえ憚ったのである。

寛永4年（1627年）、了西は一子了光を伴い帰郷し、専教寺の再建を目指したが、門徒は廃寺を離れ、再建は困難を極めた。ようやく50軒ばかりの門徒を訪ね、寄進を受けささやかながら一字を建立し、多賀谷一族の菩提を弔った。その後は了光が引き継ぎ、それ以降も代々の専教寺住僧が多賀谷一族の菩提を弔っている」

史実に照らし合わせ専教寺再興物語を創作したのだが、どうであろうか。

戦国非情 結城氏・多賀谷氏伝 了。

参考資料 関城町史 下妻市史 福井市史 福井県史 金津町史 細呂木村史
結城系譜 多賀谷系譜 松平大和守系譜 他。

2014年9月

編集 長谷川勲

) の系譜 第三部 (NO34~54)

結城秀康は6男2女の子をもうけた。そのうち長女、4男が早世している。長男忠直

(北ノ庄藩2代藩主)、次男忠昌(北ノ庄藩4代藩主。福居藩。)、次女喜佐姫(長州藩

初代藩主・毛利秀就正室)、3男直政(越前大野藩初代藩主。1601~1666)、4男吉松

(早世)、5男直基(越前勝山藩初代藩主。1604~1648)、6男直良(越前木本藩初代藩

主。1605~1678)である。後に直政、直基、直良は移封され、それぞれが直政系越前松平氏、直基系越前松平氏、直良系越前松平氏として明治維新まで大名として存続した。その系譜を紹介したい。(徳川諸家系譜より)

※ 忠直の配流処分の後、家督は忠直嫡男・光長に譲られたのだが、光長は幼少につき北ノ庄藩藩主に就かず、越後高田藩に移封となった経緯がある。その場合3代藩主は忠昌、それ以降1代ずつ繰り上げとなるのだが、福井県史では光長を3代藩主としている。ここでは福井県史に従いたい。

※ 忠昌・・最初は上総姉ヶ崎藩(千葉県市原市姉ヶ崎)1万石の藩主。次に常陸下妻藩(茨城県下妻市)3万石。以下、信濃松代藩(長野県松代市)12万石、越後高田藩(新潟県上越市)25万石。最後は越前北ノ庄藩52万5280石藩主。

1 北ノ庄藩(福居藩 福井藩)の系譜

「戦国非情 結城氏・多賀谷氏伝 第2部」で記述したのだが、2代藩主忠直が豊後に配流処分となった後、北ノ庄藩は解体された。すなわち北ノ庄藩68万石は丸岡藩4万6千石(藩主本多成重)、大野藩5万石(藩主松平直政)、勝山藩3万石(藩主松平直基)、木本藩2万5千石(藩主松平直良)、合わせて15万1千石が譲られ、さらに敦

賀郡が幕府に召し上げられて 50 万 5280 石に減封されたうえで忠昌に引き継がせたのである。

忠昌は北ノ庄藩を福居藩に改称し、無難に藩政をこなした。大野藩主の直政は信濃松本藩（7 万石）へ移封され、大野藩には勝山藩主の直基が入った。勝山藩には木本藩主の直良が入った。木本藩のうち 2 万石が返還され福居藩は 52 万 5280 石となった。

※ 福居藩が福井藩に改称されたのは 8 代藩主松平吉品よしのりの時代。

忠昌は正保しょうほう2 年 8 月 1 日（1645 年 9 月 20 日）に死去した。享年 49 歳。忠昌の治世は 18 年に及んだのだが、北ノ庄藩～福居藩～福井藩で最も安定していた時代といわれている。

4 代当主は嫡男光通みつみち（1636～1674）が継いだ。忠昌には長男、昌勝まさかつ（1636～1693）がいた。昌勝は光通より 2 ヶ月早く生まれたが母は側室で、次男ではあるが正室の子光通が当主の座に就いたのである。昌勝には忠昌の遺言により 5 万石を分与して松岡藩を興させた。五男の庶子昌親まさちか（三男、四男は早世そうせい）には 2 万 5 千石を分与し吉江藩（鯖江市吉江町）を興させた。福居藩は 45 万 280 石となった。

※近松門左衛門（杉森のぶもり信盛。1653～1725）の父・杉森のぶよし信義は昌親が吉江藩主のとき、近臣として仕えた。信義が昌親のもとを辞したのは寛文 4 年（1644）で、信盛 11 歳のときである。

光通の正室は越後高田藩の藩主松平光長みつなが（忠直嫡男）の娘、国姫である。2 代將軍秀忠の娘、天崇院てんすういん（勝姫・忠直の正室。光長の生母）の孫になる。光長も天崇院も我が血筋から福居藩藩主を出したいとの強い執着があった。国姫を半ば強引に光通に押し付けたのである。

それでも光通と国姫の間には二人の女兒が誕生した。しかし光長や天崇院が望む男子は誕生しなかった。光長は側室との間にごんどう権蔵（後の直堅なおかた。1656～1697）という男子をもうけたのだが、光長も天崇院も後継とは認めず、あくまでも国姫との間に生まれた男子を後継にすべきと主張した。だが国姫は懐妊せず、35 歳のとき、周囲の期待に耐え

かねて自害した。

本来なら後継は権蔵になるのだが、光長と天崇院は国姫の死は彼の存在にあると憎んだ。身の危険を感じた権蔵は福居を出奔し、叔父である大野藩主、松平直良なおよしのもとに逃れた。

藩内は後継を巡り、光通の庶子、権蔵を推挙する家臣、光通の兄ではあるが庶子の昌勝（松岡藩主）、同じく庶子の弟、昌親（吉江藩主）を推挙する家臣が対立し、騒動に発展した。妻の自害、藩内の内紛は教養人ではあったが、ひ弱な光通を追い詰めた。光通は精神の安定を欠き、床に伏せるようになった。国姫の死から3年後の延宝2年3月24日（1674年4月29日）、後継を異母弟の昌親に指名して自刃した。享年39歳。

兄の昌勝が露骨に後継の座に就くことを求め、藩論も昌勝派が大勢を占め、昌勝擁立を光通に迫ったため、反発した光通が昌親を指名したといわれている。福居藩は吉江藩を併合して47万5280石となった。

昌親が福居藩主となった翌年の延宝3年は飢饉となった。前年の6月11日（1674年7月14日）に雹ひょうが降るなどの異常気象が大凶作の原因となった。

「延宝3年卯 天下飢饉 別シテ越前人多死 掘穴埋死人」

（延宝3年卯年・・・1675年・・・全国的に飢饉発生 特に越前の領民餓死する者多し 穴を掘り死人を埋めた）との記録が残っている。

就任早々、昌親は困難に直面した。加えて長兄の昌勝しりぞを斥けて末弟の昌親が家督相続したことに藩内、とりわけ昌勝派から反発の声が続出した。延宝4年7月21日（1676年8月30日）、昌親は隠居した。在任2年余であった。

後継は長兄、昌勝の嫡男・綱昌つなまさであった。これで福居藩は落ち着いたと思われたのだが、綱昌には元々藩主としての資質はなかった。長ずるに及んでも藩政に対応できる能力に欠け、立ち居振る舞いにも資質を疑わせた。最初は昌勝派の重臣たちが取り繕っていたのだが、彼等も綱昌の資質に疑問を抱くようになった。藩内では前藩主の昌親派の巻き返しが始まった。綱昌への非難が始まると、彼は苛立ち、立腹のあまり家臣を手打ちにするようになったのである。綱昌の機嫌を損じることを恐れた家臣は藩政への意見

具申どころか、近づくとさえ避けた。

延宝8年8月6日（1680年8月29日）、台風が日本を直撃した。強風と豪雨によって作物は甚大な被害を受け、凶作は全国に及んだ。翌年の天和元年（1681年）はさらに深刻であった。この年は大旱（大ひでり）の被害に加えて、7月28日（9月10日）の台風で稲はことごとく吹き飛ばされ、凶作となった。2年続きの凶作に米の値段は高騰し、民衆は困窮し、乞食、飢死者がでた。各藩では（貧民に米を施す）施米などの対策をとったが、福居藩では対応が遅れ、大量の飢死者を出した。餓死者は町にあふれ疫病も蔓延した。藩の財政も飢饉により悪化した。延宝3年（5年前）の教訓が生かされなかったのである。

「御国大ニ飢饉ス 餓死人道橋ヲ塞ギ 死骸平岡山石ヶ谷ニ埋」

「当年大飢饉ニ付収納相滞」 へんろうき 片聾記より

（福居藩に大飢饉発生する。餓死者は道、橋にあふれ、死骸は平岡山石ヶ谷に埋められた。当年は大飢饉により年貢の徴収は滞った）
福井藩士伊藤作右衛門が著した片聾記（福井藩歴史書）に当時の事が記されている。

綱昌の治世能力の欠如は明らかであった。非難の声が高まると彼は精神の異常をきたした。理由もなく家臣を殺害し、それは側近にまで及んだ。藩内だけではなく、公の席でも奇行が目についた。大名在府（江戸詰）の折には江戸城登城が義務付けられており、怠れば幕府から叱責され、重なれば改易の口実を与える。それにもかかわらず綱昌は怠った。

怠ったというより、人前に出ることができなかつたのであろう。それほど綱昌の病状は深刻だった。やむを得ず前藩主の昌親が代行したのだが、すでに綱昌の奇行、乱行は幕閣にも知れ渡っており、幕府は「綱昌は狂気」と断じ、藩主の座を剥奪し蟄居を申し渡した。

福居藩に対しては、御家門（松平家）筆頭の家柄であることを配慮し、廃絶にはしなかった。処分は前藩主・昌親の復帰を許したうえで47万5280石をいったん召し上げ、改めて25万石を与えたのである。貞享3年（1686年）3月のことで世に「貞享の半

知」とよばれている。

昌親は福居藩主に復帰し、名前を吉品よしのりと改めた。吉品は福居を福井と改称した。この事件により福井藩の格式は格段に落とされた。従来幕府からの文書の宛名は「越前少将」であったが「越前侍従じじゅう」と格下げされ、江戸城の詰間づめのま（将軍に拝謁する際の控席）は御三家と同じく最上席の大廊下であったのが、外様の大大名と同じ大広間に移された。

知行半減は当然ながら藩財政の破綻を招いた。吉品は財政再建のために家臣の削減、俸禄の半減を実施した。また特産品の越前和紙を藩の専売にするなど、産業振興にも力を注いだ。吉品の治世の間、凶作が続いたこともあり、慢性的な財源不足に陥って、御用金による調達、藩札の増刷は恒常化していった。

吉品は宝永7年（1710年）に隠居した。彼には嗣子ししはなく、異母兄・昌勝（綱昌の父）

の六男昌邦まさくにを養子に迎え後継ぎとした。昌邦は後に吉邦よしくにと名を改めた。吉品は家督を譲った翌年死去した。享年 72 歳。

吉邦は兄綱昌と異なり名君であった。吉品が道半ばであった財政再建を果たし、善政を敷いて領民から慕われたという。享保6年（1721年）死去。享年 41 歳。吉邦にも嗣子はなく、兄の宗昌むねまさ（昌勝三男）が福井藩主となった。宗昌は松岡藩（5万石）の藩主であったため、福井藩は松岡藩を併合し 30万石となった。

※ 宗昌には嗣子となる男子がいなかったため、白河新田藩主松平知清ちかきよ（後述）の二

男・宗矩むねのりを養子として 11代当主とした。松平知清は結城秀康の 5男・松平直基（結城直基）の孫。父は直矩。

※ 宗矩にも実子がおらず、一橋徳川家当主の徳川宗尹むねただの長男重昌しげまさを養子に迎えた。代々続いていた結城秀康血脈の福井藩主は宗矩の代で途絶えた。

※ 宗昌の 4代後、14代藩主、治好はるよしの代に 2万石加増され、それ以降、越前松平藩

は 32 万石として明治維新を迎えた。

尚、^{みちみつ}光通の実子ながら継承を放棄し出奔した^{なおかた}権蔵（後の松平直堅。前述）は元禄 10 年

（1697 年）死去した。享年 42 歳。嫡男^{なおとも}直知は 21 歳で夭折。直知に実子がないため

^{なおゆき}松平直之（1682～1718）を直知の養子とした。直之の祖母は^{なおよし}松平直良（権蔵が頼った

叔父。結城秀康の 6 男）の娘^{りょうちいん}了達院。祖父は^{なおまさ}松平直政（結城秀康の 3 男）の次男松平

^{ちかよし}近栄（後述）である。直之は後に越前松平系糸魚川藩（1 万石）の初代藩主となった。

幕末に至り、末裔の^{なおきよ}松平直廉（糸魚川 7 代藩主）は^{よしなが}松平慶永（春嶽）の養子となり、名

^{もちあき}を茂昭と改め、18 代藩主となった。福居藩を出奔した^{なおきよ}権蔵（直堅）の家系が福井藩最後の藩主として登場した。歴史の因縁である。（別項 NO6 糸魚川松平氏の系譜で記述）

歴代福井藩主一覧

1 結城秀康 徳川家康の次男 就任 慶長 5 年（1600）27 歳 享年 34 歳
（1574～1607）北ノ庄藩 68 万石。

2 松平忠直 結城秀康の長男 就任 慶長 12 年（1607）13 歳 享年 56 歳
（1595～1650）

3 ^{みつなが}松平光長 ^{なほむね}松平忠直の長男 就任 元和 9 年（1623）9 歳 享年 93 歳
（1616～1707）

※ 松平光長は越後高田藩に移封。越後高田藩については別項で記述。

4 ^{ただまさ}松平忠昌 結城秀康の次男 就任 ^{かんえい}寛永元年（1624）28 歳 享年 49 歳
（1598～1645）北ノ庄改め福居藩 52 万 5280 石。

5 ^{みつみち}松平光通 ^{なほむね}松平忠昌の次男 就任 正保 2 年（1645）10 歳 享年 39 歳
（1636～1674）福居藩 45 万 280 石になる。

6 ^{まさちか}松平昌親 ^{なほむね}松平忠昌の五男 就任 延宝 2 年（1674）35 歳 没年は^{よしのり}吉品に記入

(1640～1711)

※ 光通は次男だが正室の子であり、長男だが庶子の昌勝を斥け光通が忠昌の後継となった。その経緯から光通は昌勝を嫌い、死にあたって(自刃)弟の昌親(庶子)を後継に指名した。しかし、昌勝派の反発が強く、2年足らずで藩主の座を昌勝の長男、綱昌に譲った。

※ 昌親が吉江藩主のとき、近松門左衛門(杉森^{のぶもり}信盛)の父杉森^{のぶよし}信義が昌親の近臣として仕えていた。信義が昌親のもとを去ったのは寛文4年(1664)、信盛11歳のときであった。

※ 昌親、藩主に就くと任地の吉江藩2万5千石を福居藩に戻し、47万5280石となる。

7 松平綱昌 松平昌勝の長男 就任 延宝4年(1676)16歳 享年39歳
(1661～1699)

※ 綱昌は乱行が続き、失政もあったため、幕府より隠居を申し渡された。

8 松平吉品 昌親の再任 就任 貞享3年(1686)47歳 享年72歳

※ 幕府は綱昌の不行跡を叱責し福居藩を知行半減処分(25万石)としたうえで前藩主・昌親の復帰を許した。昌親は藩主に復帰するに当たり吉品に改称した。吉品に嗣子がいなかったため、兄昌勝の六男、昌邦を養子とした。昌邦は藩主の座に付くと吉邦と改称した。

※ 吉品は藩主復帰に伴い、福居を福井と改称した。福井藩25万石。

9 松平吉邦 松平昌勝の六男 就任 宝永7年(1710)30歳 享年41歳

(1681～1722)

吉邦にも嗣子がおらず実兄の宗昌(松岡藩5万石)が跡を継いだ。

10 松平宗昌 松平昌勝の三男 就任 享保6年(1721)47歳 享年50歳

(1675～1724)

※ 宗昌は松岡藩(5万石)の藩主であったが、吉邦の死去に伴い、福井藩主となった。福井藩は松岡藩5万石を併合し30万石になった。

宗昌にも嗣子がおらず、越前松平家系白河新田藩主・松平知清の次男宗矩に前藩主吉邦の娘、勝姫を娶わせ世継ぎとした。

11 松平宗矩 松平知清の次男 就任 享保9年(1724)10歳 享年35歳

(1715～1749)

※ 松平知清は結城秀康五男の結城（松平）直基（後述）の孫。父は直矩（後述）。

宗矩にも実子がいなかったため、一橋家から養子を迎えた。結城秀康血統福井藩主は宗矩の代で絶えた。

12 松平重昌 徳川宗尹の長男 就任 寛延2年（1749）7歳 享年 16歳

(1743～1758)

※ 徳川宗尹は8代将軍徳川吉宗の4男。徳川御三卿のひとつ一橋家の初代当主。重昌が夭折したため、弟の重富が後を継いだ。

13 松平重富 徳川宗尹の三男 就任 宝暦8年（1758）11歳 享年 62歳

(1748～1809)

14 松平治好 松平重富の長男 就任 寛政11年（1799）32歳 享年 58歳

(1768～1826) 福井藩 2万石加増され 32万石となる。

15 松平斉承 松平治好の次男 就任 文政9年（1826）16歳 享年 25歳

(1811～1835)

斉承の実子はすべて早世しているため家斉の子・斉善を養子に迎えた。

16 松平斉善 徳川家斉の二十四男 就任 天保6年（1835）16歳 享年 19歳

(1820～1838)

家斉は11代将軍。斉善にも実子はおらず田安家から養子を迎えた。

17 松平慶永 徳川斉匡の八男 就任 天保9年（1838）11歳 享年 63歳

(1828～1890・・・明治23年)

※ 徳川斉匡は御三卿のひとつ田安徳川家の3代当主。

※ 松平慶永は幕府大老伊井直弼と対立し、安政5年（1858年）7月、幕府より隠居を申し渡され謹慎処分を受けた（安政の大獄）。慶永30歳であった。慶永は越前松平家系系魚川藩（1万石）7代藩主、松平直廉を養子として迎え、福井藩を継がせた。

直廉は茂昭と改名した。

18 松平^{しげもち}茂昭 松平^{なおはる}直春の長男 就任 安政 5 年 (1858) 23 歳 享年 55 歳
(1836~1890)

※ 松平直春は越前松平系糸魚川藩 6 代藩主。福井藩最後の藩主。

2 越後高田藩の系譜

北ノ庄藩主・松平忠直に元和 9 年 (1623 年) 2 月、豊前に配流処分が下された。忠直時代 68 万石あった所領のうち、忠直の弟・直政 (秀康 3 男) は大野 5 万石を、直基 (秀康 5 男。4 男は早世) は勝山 3 万石を、直良 (同 6 男) は木本 2 万 5 千石を与えられ、^{それぞれ}其々が立藩した。さらに重臣の本多成重には丸岡 4 万 6 千石が与えられ (本多丸岡藩の成立)、敦賀領が幕府直轄地として取り上げられた。北ノ庄藩は 52 万 5 千石になり、忠直嫡男・光長 (9 歳) が引き継いだ (前述)。だが、翌年 4 月幕府は越後高田藩 (25 万 9 千石) の松平忠昌に北ノ庄藩移封を命じ、高田藩には光長を充てることを決定した。国替えである。

※ 後に木本藩 (2 万 5 千石) のうち 2 万石分が北ノ庄藩に戻され、忠昌の時代、52 万 5280 石となった。

忠昌は高田藩士を引き連れて越前に入国し、光長は北ノ庄藩士の多くを引き連れて越後高田藩に移った。藩家臣団 5 百有余名のうち北ノ庄藩に残ったのは百名余といわれている。あとは光長に伴い越後高田藩に移った。無論、それ以前に直政、直基、直良に従って北ノ庄藩を離れた家臣も、丸岡藩に移った家臣もいたであろう。

越後高田藩主となった光長は一男二女をもうけた。嫡男^{つなかつ}綱賢、国姫、^{いなひめ}稲姫である。

国姫は福居藩 5 代藩主松平^{みつみち}光通の正室となった (前述)。稲姫は伊予宇和島藩 2 代藩主

伊達^{むねとし}宗利の正室となった。綱賢は元来病弱だったのであろう、家督を継ぐことなく、42 歳で死去した (1674 年)。綱賢には子供がいなかったから、高田藩断絶の危機である。

だが、後継候補は準備されていた。北ノ庄藩 2 代藩主・松平忠直が配流先で侍女に産ませた子供たちで、光長の異母弟妹にあたる。忠直は豊後^{はぎはら}府内萩原 (大分市萩原)、後に津守 (大分市津守) で軟禁生活を送っていたのだが、その間、侍女との間に^{ながより}長頼 (1630

～1667)、長良ながよし (1632～1701) とおくせ (早世)とき 閑 (生没年不明) の二男二女をもうけていた。長頼、長良は結城秀康の母、於万おまんの方かたの実家、永見姓を名乗った。忠直は慶安3年9月10日 (1650年10月5日) に死去しているのだが (享年56歳)、3人の遺児たちは異母兄の越後高田藩主・松平光長に引き取られて、それぞれ2千石が与えられていた。遺児といっても長頼は21歳、長良は19歳になっていた。(光長は34歳だった)。閑は高田藩に移った後、小栗美作びさく (正矩まさのりとも。後に越後高田藩首席家老) に嫁いだ。

越後高田藩の後継候補となった兄弟だが、兄の永見長頼は綱賢かんに先立つこと7年、寛文7年 (1667年) に38歳で死去している。長頼の嫡男、万徳丸まんとくまる (1662～1735。元服して市正いちまさ) は綱賢の死去のとき13歳と思われる。永見長良は43歳になっていた。

永見長良、永見市正と小栗美作と閑との子、小栗長治おぐりながはる (後に大六) の3人が候補となった。さらに徳川一門から世継ぎを迎えようとする動きもあった。候補となったのは尾張藩2代藩主徳川光友みつともの次男・松平義行よしゆきである。義行の母は徳川家光の長女・千代姫、越後高田藩の安泰には絶好の世継候補である。

後継をめぐって藩論は紛糾した。原因は藩内の対立である。越後高田藩の実権は首席家老・小栗美作が握っており、美作の強権的な手法に他の重臣、萩田主馬はぎたしゅめ、岡島彦岐い き、本多七左衛門しちざえもんのみならず家臣の多くが美作に反発していた。

小栗美作が強権的な手法をとらざるを得なかったのには理由があった。寛文5年 (1665年) 12月、地震に襲われた越後高田藩は大きな被害を受けた。時の執政、小栗五郎左衛門ごろうざえもん、萩田隼人はやとは圧死した。彼等の嫡男・小栗美作、萩田主馬が家督を継ぎ藩政を担った。

小栗美作は幕府より5万両を借り、高田の復興にあたった。城下の区画整理、直江津に港を造り、関川（信濃、越後を通過し日本海に注ぐ一級河川）の浚渫、用水路の開削、新田の開発などに着手した。さらに煙草葉の栽培、銀の採掘など殖産興業にも力をいれた。

いずれも多額の資金を要する。その費用を捻出するため藩士の禄を地方知行制から蔵米制にあらためた。地方知行制というのは藩が家臣に禄として知行（地方と呼ばれる土地と、そこで生産活動をする百姓の支配権）を与えることである。一方、蔵米制度とは藩が一元的に所領を管理し、年貢を藩の蔵に納めさせ（蔵米）、藩士の石高にしたがって支給する制度である。

※ 江戸時代中期以降は特定の上級武士を除き蔵米制度だった。

下級藩士は以前より蔵米制であったが、中、上級藩士は知行制の特権を認められていた。その特権を剥奪されたのである。さらに財政に窮した諸藩の手法として藩士の俸禄の一部を返上させることが慣習化していたのだが、越後高田藩も例外ではなかったであろう。藩士にとって二重の負担増となり、執政・小栗美作への反感となった。萩田主馬も美作と袂を分かち対決するようになった。

藩士ばかりではなかった。（彼の施策は後世評価されるのだが）矢継ぎ早の土木工事は増税となって跳ね返り、領民に負担を強いた。一方で藩主光長の贅沢な生活は収まらず、美作もそれに倣った。藩内外からの怨嗟の声は当然、美作に向かった。

藩主・光長の嫡男綱賢が死去し世継ぎが絶えたとき、美作が我が子の小栗長治を世継ぎに据えるのではないかと彼等は疑念を抱いていた。後継問題を契機に反小栗派が形成され、美作追い落としが開始された。その先頭に立ったのは永見長良と萩田主馬であった。藩内の醜悪な権力争いを目の当たりにして尾張徳川家では早々に後継問題から手を引いた。

後継問題は重臣の評議の結果、永見市正に決定した。市正は松平光長の養子となり名を松平綱国と改めた。後継問題は対立する小栗美作の子・小栗長治でも、反小栗派が推す氷見長良でもなく、市正に決まったことで落ち着いたように見えた。

だが、反小栗派はこの決定を小栗美作の策謀と断じた。幼年の市正をいったん藩主とすることで長良擁立論を封じこみ、自身は市正（綱国）の背後にあって藩政を操る。いずれ機会を捉えて長良派を排除して、その上で綱国を隠居させ、小栗長治を藩主に据える陰謀であると、藩内に触れまわったのである。

かねてより小栗美作の強引な藩政運営に不満を抱いていた家臣たちは萩田主馬らの訴えに同調した。萩田主馬ら反小栗派重臣は藩主光長に目通りして、小栗美作の悪政を糾弾する書状を提出した。書状には糾弾に同意する 890 名の誓紙せいしが添えられていた。890 名という人数は越後高田藩の藩士の数よりも多い。領民も加わっていたのである。

彼等は藩政を私している小栗美作を排除することが藩の為、主君の為、領民の為と主張し、自らを「お為方おためかた」と称していた。光長の嫡男・綱賢の死去から 5 年後の延宝 7 年（1679 年）の正月であった。

首席家老・小栗美作非難の藩論の高まり、長引く抗争に光長は美作に隠居を命じ事態の收拾を図ろうとした。美作は長治に家督を譲って隠居したのだが、勢いづいたお為方は隠居のみならず、小栗一派の藩政からの一掃を藩主光長に迫った。小栗美作はこの動きは永見長良の扇動によるものと捉え、お為方の狙いは綱国を傀儡化して藩政の実権を掌握することにあると睨んだ。双方の不信感と憎悪は募り、市中での争い、放火騒動が勃発し越後高田藩は混乱きわの極みに達した。

もはや手に負えなくなった光長は懇意にしていた幕府大老・酒井忠清ただきよに解決を委ねた。忠清は双方に和解を申し渡し穏便に済ませようとしたが、お為方は美作糾弾の手を緩めず解決の糸口は見えなかった。延宝 7 年 10 月、業を煮やした忠清は幕命による処分を下した。幕府の調停を受け入れず、いたずらに藩政を混乱させた罪として、長良を毛利藩預けとし、他の首謀者も諸大名預けとして越後高田藩から追放したのである。

高田藩は従来の方針通り永見市正こと松平綱国が継承し騒動は酒井忠清の裁定により落ち着いたように見えた。だが、お為方は反撃の機会を窺っていた。

翌延宝 8 年 5 月 8 日（1680 年 6 月 4 日）、徳川 4 代将軍・家綱が死去した。享年 40 歳。家綱は万事鷹揚おうようで些細こたわなことに拘らず大名、家臣からの人望があったと評されて

いる。ただ家綱には実子がおらず、家綱自身も病弱であったため、後継問題は生前より徳川一門、幕閣の最大懸案事項であった。老中・堀田正俊は家綱の5歳年下の異母弟の館林藩主・松平綱吉^{つなよし}を後継として推挙した。(他の弟はいずれも夭折)。

一方、綱吉の後継に難色を示し、他家より迎えようとしたのが酒井忠清だった。家綱とは正反対の性格で自信過剰、幕政にも口を挟む館林宰相・綱吉を忠清は以前から嫌っていた。忠清の意中の人物は有栖川宮幸仁親王^{ありすわのみやゆきひとしんのう}だったとされている。越後高田藩主・松平光長も綱吉後継に反対していた。

- ※ 近年、忠清が有栖川宮幸仁親王擁立を画策したという説に疑問を抱く学者もいる。
- ※ 有栖川宮家と徳川家の関係。 徳川秀忠の養女・亀姫(松平忠直の娘。秀忠の孫。

光長の同母妹)は有栖川家(当初は高松宮を名乗る)の初代当主・好仁親王^{よしひとしんのう}の妃^{きさき}。

好仁親王には実子がいなかったため、後水尾天皇^{ごみずのお}の皇子・良仁親王^{ながひと}を養嗣子とし

た。後に良仁親王が即位(後西天皇^{ごさい})したため、後西天皇の第二皇子の幸仁親王が有栖川宮家を継いだ。彼が酒井忠清の意中の人物である。これ以降も有栖川宮家は徳川宗家、水戸徳川家、雄藩大名と婚姻関係を結び宮家のなかでも公武派とされていた。

有栖川宮幸仁親王擁立の真偽はともかくとして幕府内でも將軍継嗣で揺れ動いたのだが、水戸藩主・徳川光圀らが綱吉擁立に傾き、延宝8年8月、綱吉は將軍宣下を受けた。

お為方は幕政の一新を捉え、権力の中樞に就いた堀田正俊に再吟味を願い出た。かねてより越後高田騒動の裁定に不満を抱いていた綱吉はこの機会を捉えて正俊に再吟味を命じた。酒井忠清は再吟味に反対したのだが^{しりぞ}斥けられ、12月には大老職を剥奪された。後任は堀田正俊であった。正俊は綱吉擁立に動き、忠清と対立した老中である。

12月、追放され他藩預けとなっていた永見長良、萩田主馬らとさらに岡島壱岐、本多七左衛門の「お為方」と小栗美作が江戸城に呼び出され吟味が始まった。天保9年(1681年)6月、小栗美作と永見長良、萩田主馬に対して將軍綱吉が直々に裁定を下した。小

栗美作と嫡男・小栗大六（松平忠直孫）は切腹、親族並びに一派は流罪、追放、大名預けの処分が下された。一方、「お為方」の、永見長良と萩田主馬は八丈島に、岡島耆岐、本多七左衛門は三宅島に流罪。その他の首謀者も大名預けとなった。一見喧嘩両成敗の裁定だが、実際は將軍継嗣をめぐる松平光長への報復であった。

藩主・光長は家中騒乱の責任を追及され、領地没収の上、伊予松山藩（愛媛県松山市）預けとなった。養嗣子の松平綱国（氷見市正。幼名万徳丸）は備後福山藩（広島県福山市）預けとなった。光長系越前松平氏の断絶である。

処分はこれに止まらなかつた。光長（光長の父・忠直は結城秀康の長男）の従兄弟にあたる姫路藩主・松平直矩（15万石。直矩の父・直基は結城秀康5男）は豊後日田藩（大分市日田。7万石）に転封。出雲広瀬藩（島根県安来市広瀬）の藩主・松平近栄（近栄の父・直政は結城秀康の3男）は3万石から1万5千石にされた。知行半減の処分である。

いずれも酒井忠清に近く、越後高田藩騒動処理に関与して連座処分されたものであるが、背景に越前松平氏と関係が深い有栖川宮幸仁親王擁立を忠清と共に画策したとの疑念を綱吉が抱いたためと指摘されている。幕府が越前福居藩主（福井藩）綱昌の狂気を理由に知行半減25万石の過酷な処分を下したのは（前述）、越後高田騒動の7年後の貞享3年（1686年）であった。綱吉の治世（1680～1709）、結城秀康の血統を継ぐ越前松平系の大名、末裔にとってまさに受難の時代であった。

八丈島に流された永見長良、萩田主馬は悲惨な最期を遂げた。八丈島は本土から遠く離れた孤島であり食料の補給手段はなく、島での自給自足で島民は命を保っていた。元禄14年（1701年）、八丈島を未曾有の大飢饉が襲い、島民の大半が餓死した。餓えは身分の貴賤を問わず、長良も主馬も他の流人と同じく餓死した。

松平光長と養嗣子の綱国のその後であるが、改易から6年後、貞享4年（1687年）、光長は72歳になった。老齢に達した光長は綱国とともに許され、賄料として合力米3

万俵（1万3千石に相当）が与えられ、大名格として処遇された。だが、不遇であった6年の歳月は光長と綱国に亀裂を生じさせた。光長は綱国を廃嫡とした。

元禄6年（1694年）、光長は松平直矩（前述）の三男・源之助（後に長矩と改名）養嗣子とした。元禄10年に光長は隠居し家督は長矩が継いだ。

その後、旧家臣らによるお家再興運動が実り、元禄11年（1698年）、松平長矩に美作国内の津山（岡山県津山市）に10万石を与えられた。長矩は宣富と改名し美作津山藩の初代となった。越後高田藩の旧家臣（北ノ庄藩士）のなかには津山藩に仕えた者も少なくはなかった。

光長は江戸で余生をおくり宝永4年11月17日（1707年12月10日）、死去した。享年93歳。

綱国は美作国津山に移り、津山藩士となったが出仕はしなかった。綱国と藩主宣富が互いの立場を熟慮した結論であろう。綱国の庶子・国近は津山藩家老・安藤勲負之常に養育され、安藤国近（主殿とも称した）と称した。享保8年（1723年）、津山藩家老となる。だが、翌年死去。享年は不明。嫡男・造酒助近倫が家督を継いだ。彼も家老職を務め、その後安藤姓を永見姓とする。以後、国近の子孫は代々津山藩の家老職を務めた。綱国は光長の死の翌年（宝永5年）に出家し、享保20年（1735年）に死去した。享年74歳。

3 直政系越前松平氏の系譜

松平直政（1661～1666）・・・上総姉ヶ崎藩1万石から越前大野藩5万石
忠直が配流処分（1623年）の翌年、北ノ庄藩から大野（5万石）を分離させ直政に大野藩を立藩させた。その後、信濃松本藩7万石に（1633年）、さらに出雲松江藩（島根県松江市）18万6千石（1638年）に移封され、寛文（1666年）死去した。享年66歳。

嫡男綱隆（1631～1675）が後継となる。その際次弟の近栄（1632～1717）に広瀬藩（島

根県安来市広瀬) 3万石、三弟の隆政(1648~1673)に母里藩(島根県安来市西母里) 1万石を分与した。広瀬藩と母里藩は松江藩の支藩として松江藩とともに明治維新まで存続した。

松江藩 ^{なおまさ}直政(結城秀康の3男)・^{つなたか}綱隆(直政の長男)・^{つなちか}綱近(綱隆の4男)・

^{よしとう}吉透(綱近の弟)・^{のぶずみ}宣維(吉透の次男)・^{むねのぶ}宗衍(宣維の長男)・^{はるさと}治郷(宗衍の次男)・

^{なりつね}齐恒(治郷の長男)・^{なりたか}齐貴(齐恒の長男)・^{さだやす}定安(養子。津山藩7代藩主松平齐孝の

7男)・^{なおたか}直応(養子。齐貴の実子)・^{さだやす}定安(復帰)・^{なおあき}直亮(定安の3男)

※ 歴代藩主で特筆されるのは7代当主治郷(1751~1818)で不昧と号し茶人として有名。雷電為衛門(1767~1825)は治郷のお抱え力士であった。

※ 松平定安(1835~1882)は文武を奨励し、西洋の学問の導入に積極的であった。家臣を西欧に留学させ医学、軍備を学ばせた。米国から戦艦八雲丸も購入した。文久3年(1863)には農民隊を創設している。高杉晋作が奇兵隊を組織した同年である。松江藩最後の藩主は松平定安。

広瀬藩 ^{ちかよし}近栄(直政の次男)・^{ちかとき}近時(近栄の長男)・^{ちかとも}近朝(近時の長男)・^{ちかあきら}近明

(養子。近朝の弟)・^{ちかてる}近輝(近明の長男)・^{ちかさだ}近貞(養子。近輝の弟)・^{なおただ}直義(養子。

津山藩4代藩主・松平長孝の次男)・^{なおひろ}直寛(養子。近貞の長男)・^{なおよし}直諒(直寛の長

男)・^{なおおき}直巳(養子。直諒の弟)

※ 初代当主近栄(1632~1717)は越後高田藩騒動に関与したことで将軍綱吉より閉門と領地半減(3万石から1万5千石)の処分を受けた(1682)後に旧領回復。

※ 越後高田藩騒動については前項を参照。

※ 直義(1754~1803)は藩の財政を立て直し、広瀬藩中興の祖といわれる。本家松江藩の松平治郷に習い茶人としても名を残した。

※ 直諒(1817~1861)は領内の産業振興(製糸、製油)、文化の振興に力を尽くした名君であった。

※ 直巳が広瀬藩最後の藩主。

母里藩 ^{たかまさ}隆政（松平直政の3男）・・・^{なおたか}直丘（直政の4男）・・・^{なおかず}直員（養子。常陸麻生藩

{茨城県麻生} 7代藩主新庄直詮^{なおのり}の次男）・・・^{なおみち}直道（直員の長男）・・・^{なおゆき}直行（養子。直道

の弟）・・・^{なおきよ}直暲（養子。明石藩4代藩主松平直泰^{なおひろ}の4男）・・・^{なおかた}直方（養子。直暲の弟）・・・

^{なおおき}直興（直方の長男）・・・^{なおより}直温（養子。津山藩7代藩主松平齐孝^{なりたか}の4男）・・・^{なおとし}直哉（直温の長男）

※3代藩主・直員（1695～1768）は典型的な暗君で己が享楽のため過酷な年貢を課したため農民が^{ちやうさん}逃散する事態が発生した。さらに領内の富豪から強制的に借金をして踏み倒し、藩の財産を切り売り、苗字帯刀の認可状を乱発するなどして享楽の費用に充てた無責任極まりない藩主といわれている。そのため母里藩は財政難に陥り、以後歴代藩主は財政運営に苦しむことになる。

※ 8代当主直興（1800～1854）は財政再建のために新田開発、灌漑用水の整備に力を注いだ。母里藩再興の名君とされている。又、教養人としても名を残した。書（嵯峨風）、画（狩野派）に優れ俳人としても名高い。

去年今とし海にもあるや西東 ^{しざん}四山

直興の俳句は小林一茶の俳諧俳文集「おらが春」にも残されている。

※母里藩最後の藩主は松平直温。

4 ^{なおもと}直基系越前松平氏の系譜

松平直基（1604～1648）は結城秀康の養父^{はるとも}晴朝の養子となり結城家の家督を継ぐ（1607）。寛永元年（1624）に越前勝山3万石を立藩後、松平氏に復姓（1626）。兄直政の松本藩移封に伴い大野藩5万石に加増移封される（1635）。さらに山形藩15万石に加増移封（1644）、その4年後に姫路藩15万石への移封を命じられたのだ、赴任への旅先で死去。後継ぎとなった^{なおのり}直矩（1642～1695）は当時5歳であった。姫路は西の要地であったため幼い藩主では心もとないと幕府は判断し、越後村上藩（新潟県村上市）15万石へ国替えとなった（1649）。成人後直矩は姫路藩に復帰するのだ

が（1667）、越後高田藩の騒動に関与したことで綱吉の勘気を被り、閉門と豊後日田ひた（大分県日田郡）7万石への領地半減の移封処分を受けた（1682）。

その4年後、直矩は山形藩10万石に加増移封され、さらに6年後、陸奥白河藩（福島県白河市）15万石に移った。石高で旧に復したのだが、
姫路→越後村上→姫路→豊後日田→山形→陸奥白河と6度の引っ越しをしている。
直基の代では勝山→大野→山形→姫路の4度の引っ越し、2代で10度の引っ越しである。引っ越し費用の捻出で藩の財政は困窮した。
大名の国替えが珍しくなかった江戸時代でも、さすがに一代で6度の国替えは異例で直矩に付けられたあだ名が「引っ越し大名」であった。

彼自身は国替えを淡々と受け入れ、どの任地でも藩務に励んでいた。彼は越後村上藩の藩主であった17歳（1658）から死の直前（1695）まで37年にわたり日記を書き記しており、任地の風土風俗、藩主の務め、観劇、鷹狩り、お家騒動が書き綴られている。「大和守日記」とよばれ大名の暮らしぶりを知る貴重な資料となっている。

尚、杉本そのこ苑子が直矩を題材にした小説「引っ越し大名の笑い」を著している。（1991）。

※柿原郷を追われた多賀谷経政が仕えたのが松平直矩。以後多賀谷氏は家老職を輩出する一族として（直基系越前松平氏系）松平大和守家臣団に名を残した。（前橋多賀谷氏の祖）

直基系越前松平家歴代当主

直基なおもと（結城秀康の5男）・直矩なおのり（直基の長男）・基知もとちか（直矩の次男）・明矩あきのり（養子。支藩の陸奥白河新田藩・松平知清ちかきよの長男）・朝矩ともりのり（明矩の長男）・直恒なおつね（朝矩の次男）・直温なおのぶ（直恒の次男）・斉典なりつね（養子。直温の弟）・典則つねのり（斉典の4男）・直侯なおよし（養子。水戸藩9代藩主水戸斉昭の8男。兄は一橋慶喜）・直克なおかつ（養子。久留米藩7代藩主・有馬頼徳よりのりの13男）・直方なおかた（養子。富山藩12代藩主・前田利聿としかたの次男）・基則もとのり（養子。松平典則のりつね{斉典の4男}の3男）

- ※ 明矩の実父・松平知清は陸奥白河藩主・松平直矩の4男。明矩が陸奥白河新田藩藩主になるも、本家陸奥白河藩藩主・基知に嗣子がいないため、養子となり本家陸奥白河藩を継ぐ。陸奥白河新田藩は本家に吸収される。
- ※ 明矩（1713～1749）の代に陸奥白河から姫路藩 15 万石に国替えとなったが 36 歳で死去。11 歳の朝矩が藩主となる。しかし幼少とあって直矩と同様に要地姫路から上野前橋藩 15 万石に移封される。だが領地の前橋は利根川の氾濫に悩まされ続けた。前橋城も浸食され、朝矩は居城、藩庁を武蔵川越（埼玉県川越市）に移し、前橋には代官所が置いた。武蔵川越藩の誕生である。朝矩が川越藩初代藩主。
- ※ 直基系越前松平 8 代、川越 4 代藩主代斉典（1797～1850）は疲弊した藩財政の再建、農村の復興策を柱とする改革を断行し名君と名高い。又家臣たちに学問を奨励した好学の藩主としても知られている。
- ※ 川越市に伝わる「川越百万灯夏祭り」は斉典の新盆に遺徳を偲ぶ家臣の娘が切子燈籠を軒先に掲げたことが始まりで、たちまち城下に広まり、やがて趣向を凝らした提灯祭りに発展した。現在多くの市民が浴衣姿で参加し「小江戸情緒」に溢れた一大イベントとして川越の夏の風物詩となっている。
- ※ 松平典則（1836～1883）は 18 歳のとき眼病を患い隠居。水戸藩主徳川斉昭なりあきの八男直侯（1839～1862）を養子に迎えた。直侯が夭折したため久留米藩主有馬頼徳よりの十三男直克（1840～1897）を養子に迎え藩主に据えた。直克は幕政に参加し、政治総裁職（前任者は福井藩主松平春嶽）に就任し、將軍後見職であった一橋慶喜とともに將軍家茂を支えてきたのだが、水戸攘夷派が引き起こした天狗党の乱鎮圧に反対し（直克の養父直侯は水戸藩主斉昭の 8 男で、慶喜は斉昭の 7 男）、他の幕閣と対立し政治総裁職を罷免された（1864）。
- ※ 利根川の大改修により前橋藩を悩ませ続けてきた氾濫の危険性が薄れてきた。おりしも横浜開港に伴い前橋が発展し、生糸産業が盛んになると輸出で財をなした前橋豪商を中心として川越から前橋への帰藩運動がおこった。彼等は前橋城再建資金の献金を申し出て、直克が藩主のとき、武蔵川越藩から前橋藩に戻った。明治維新の前年、慶応 3 年（1867）のことである。
- ※ 直克の跡は富山藩 12 代藩主・前田利としかた豊の次男、直方が継いだ。直方の跡は直基系越前松平氏 9 代典則の 3 男、基則が継いだ。
- ※ 前橋藩最後の藩主は松平直克。

5 直良系越前松平氏の系譜

元和9年(1623)、長兄の忠直が配流処分となると北ノ庄藩は分割され、6男の松平直良(1605~1678)には越前^{このもと}木本藩2万5千石が与えられた(1624)。さらに大野藩5万石藩主・直政が信濃松本藩に移封され、大野藩主に勝山藩3万石藩主・直基が就くと勝山藩主の直良が就き木本藩は福居藩に戻された(1635)。直基が大野藩から山形藩15万石に加増移封されると、大野藩主に就いた(1644)。

直義系越前松平氏歴代藩主

^{なおよし}直良(結城秀康の6男)・^{なおあき}直明(直良の3男)・^{なおつね}直常(直明の長男)・^{なおすみ}直純(直常の長男)・^{なおひろ}直泰(直純の長男)・^{なおゆき}直之(直泰の長男)・^{なおちか}直周(養子。直之の弟)・^{なりつぐ}直韶(直周の次男)・^{なりこと}直宣(養子。徳川家斉25男)・^{よしのり}慶憲(直宣の長男)・^{なおむね}直致(慶憲の長男)・^{なおのり}直徳(慶憲の次男)

※直明(1656~1721)の代、大野藩から播磨明石藩6万石に移封(1682)。松平明石藩の初代となる。直良系越前松平氏としては2代。

※直韶には後継となる嫡男、慶憲がいたのだが、徳川11代将軍家斉が自分の25男、

^{ちかまる}周丸を無理やり直韶の養嗣子に押し込み明石藩8代藩主に据えた、直宣(1825~1844)である。直宣の就任により明石藩は6万石から8万石に加増された。(ちなみに福井藩16代藩主^{なりさわ}松平直善は家斉の24男)

※直宣は20歳で夭折し、嗣子がいなかったため慶憲(1826~1897)が9代藩主となった。慶憲は明治2年(1869)隠居、最後の藩主となった。

6 福井藩越前松平家分家・糸魚川越前松平氏の系譜

越前福居藩5代藩主・松平^{みつみち}光通と正室国姫との間には二人の娘がいたが、男子はい

なかった。側室^{おみのかた?}御三の方との間に権蔵（成人して直堅を名乗る。1656～1697）が生まれていたので

が、国姫の父・松平光長^{みつなが}（忠直の長男、北ノ庄3代藩主。越後高田藩藩主）と祖母の天崇院^{てんすういん}（勝姫。忠直の正室。2代將軍秀忠の3女）は直堅が嗣子となることを許さず、あくまでも国姫が男子を産むことを望んだ。だが国姫に男子は誕生せず、周囲の重圧から国姫は35歳で自害した。光長、天崇院は国姫自害の原因は直堅の存在にあったとして憎み、殺害を目論んだといわれている。身に危険を感じた直堅は城下を出奔し松平直良（大野藩主）の江戸藩邸に逃れた（1673）。

彼が直良を頼った理由は、直堅の母・御三の方は信濃国伊那の名門片桐氏^{かたぎりうじ}の出で、直良の外祖父津田信益^{のぶます}は片桐且元^{かつもと}（賤ヶ岳七本槍の一人）に仕えていたことがあった。その

縁で信益が口添えして御三の方は直良の母・奈和^{なわ}（信益の娘）に仕え、その後光通の側室となった経緯からである。直良は本家福居藩後継に口出しする天崇院、光長を不愉快に思っていたのであろう。直堅を江戸藩邸に匿った。さらに4代將軍家綱にお目見えさせた。直堅は幕府から賄料1万俵（4千石）江戸定府諸侯（江戸に常駐して参勤交代を免除される大名）に名を連ねた（1675）。さらに赤坂に屋敷を与えられ（1677）、大名に準ずる処遇を得たのである。福居藩越前松平家分家と認められたのである。これらは直良の計らい^{はか}であった。直堅の死後、家督は嫡男直知^{なおとも}が継いだ。直知は21歳で夭折

し、実子がいなかったため、妹亀姫の婿養子であった直之^{なおゆき}が継いだ。享保2年（1717）、直之は糸魚川1万石の藩主に任じられた。

※再確認 北ノ庄藩が福居藩に改称されたのは忠昌が藩主となった1623年以降。福居藩が福井藩に改称されたのは吉品^{よしのり}が藩主として復帰した1686年以降。

糸魚川松平家系図

直堅^{なおかた}（福居藩代藩主・松平光通^{みつみち}の庶子）・・・直知^{なおとも}（直堅の長男）・・・直之^{なおゆき}（養子。広瀬藩

2代藩主・松平近時^{ちかとき}の3男）・・・直好^{なおよし}（養子。伊勢長島藩初代藩主・松平康尚^{やすなお}の5男）・・・

堅房（直好の4男）・直紹（堅房の7男）・直益（直紹の長男）・直春（直益の次

男）・直廉（直春の4男）・直静（直春の養子。明石藩7代藩主・松平齐韶の7男）

※ 直知が21歳で夭折し、実子がいなかったため直堅の娘亀姫の婿養子となっていた直之（広瀬藩2代藩主松平近時の3男）直之が後継となった。

※ 直之も実子がいないまま死去（享年37歳）。伊勢長島藩初代藩主松平康尚の定員を養子として迎え後継ぎとした、直好である。

※ 安政5年（1858）、福井藩17代藩主松平慶永（春嶽）が大老伊井直弼により隠居謹慎を命じられ（慶永30歳）当時、慶永に世継ぎとなる男子がおらず、糸魚川松平藩の直廉を養子にして福井は18代藩主とした。一方、糸魚川藩では明石藩7代藩主松平齐韶の7男、直静を先代直春の養子として糸魚川藩を継がせた。直静が糸魚川藩最後の藩主である。

※ 福居（福井）藩松平分家の初代は松平直堅、糸魚川松平氏の初代は松平直之。

7 越前松平氏津山藩

越後高田騒動により藩は改易、藩主松平光長（忠直の嫡男）は伊予松山藩（愛媛県松山市）配流、養嗣子松平綱国（旧姓永見市正。忠直の孫。光長の甥）は備後福山藩（広

島県福山市）配流なった（1681）。貞享4年（1687）、光長、綱国は許され、合力米（賄米）として3万俵（1万2千石）を与えられ諸侯（大名格）に復帰した。だが光長は綱国を廃嫡とした（1693）。両者の関係が破綻したのである。光長は叔父の白河藩主松平直矩（忠直の弟）の3男長矩（後に宣富と改名）を養嗣子とした。光長が隠居した

（1697）翌年、元禄11年（1698）、長矩に美作津山藩10万石が与えられた。その際、綱国も美作に移った。資料によれば綱国には嫡男国近がおり、彼は津山藩家老・安藤鞆負之常の養子となり名を安藤国近（主殿とも称した）とあらため、家老職を継いだ。

子孫は安藤姓を永見姓に戻し、代々津山藩家老職を務めたのだが、明治に入ると松平姓に復している。

※2 で 越後高田藩の系譜で長矩と綱国の関係を記述。

津山松平家系図

みつなが 光長 (松平忠直の嫡男) ・ ・ のぶとみ 宣富 (養子。松平直矩の 3 男) ・ ・ あさごろう 浅五郎 (宣富の長男) ・ ・

ながうひろ 長 熙 (養子。宣富の弟 ・ 松平知清の 3 男) ・ ・ ながたか 長 孝 (養子。広瀬藩 3 代藩主 ・ 松平知

とも 朝の 3 男) ・ ・ やすちか 康 哉 (長孝の長男) ・ ・ やすはる 康 义 (康哉の次男) ・ ・ なりたか 斉 孝 (康义の弟) ・ ・ ちか 斉

たみ 民 (養子。将軍家斉の 14 男) ・ ・ いえなり 慶 倫 (養子。斉孝の 3 男) ・ ・ やすとも 康 倫 (弟。斉民の 4 男)

※浅五郎 (幼名) は 11 歳で夭折。宣富には浅五郎以外の男子がおらず、弟 ・ 松平知清 (松平直矩の 4 男) の 3 男長熙が継いだ。本来なら藩主が嗣子を立てずに死去した場合、改易になるのだが御家門 (徳川一門) ということで特例が認められた。但し 10 万石から 5 万石に減封された。

※長熙も 16 歳で夭折。広瀬藩 3 代藩主松平近朝の次男 ・ 長孝が養子となり継いだ。

※康义は 20 歳で夭折し、弟の斉孝が継いだ。斉孝 30 歳当時、嫡男がいなかったため、

11 代将軍徳川家斉の 14 男を養嗣子に迎えた家督を譲った。斉民 (1814~1891) である。その見返りとして津山藩は 5 万石から 10 万石に復したのである。

※斉民が藩主であったのは天保 2 年から安政 2 年までである (1831~1855 18 歳~42 歳)。財政再建と人材育成に努めた名君とされている。だが彼の真骨頂は安政 2 年

(1855)、家督を養子の松平慶倫に譲って隠居してからである。幕末、津山藩は勤皇 ・ 佐幕で揺れた。藩主慶倫は長州藩の京都追放 (8 月 18 日の政変。1863) 以後、尊王攘夷派を藩内から追放した。だが斉民は時勢の変化を読み、慶応元年 (1865) 津山藩を勤

皇派に転換させた。維新後、彼は天璋院 (篤姫) と図って徳川宗家の存続に心を砕き、

徳川宗家当主に田安亀之助 (徳川家達) が 5 歳で就くと斉民が後見役となり、天璋院とともに亀之助を養育した。彼の律儀さは明治政府、徳川一門からも信頼が厚く、徳川一

門にあって長老的存在であった。

※津山藩最後の藩主慶倫は家督を齊民の3男康倫やすともに譲り死去。

後記

結城秀康は6男2女がいた。そのうち4男吉松は早世した。長男忠直は豊後に配流され、嫡男光長は北ノ庄藩から越後高田藩に国替えとなり、お家騒動で改易となった。後に許され3万俵（1万2千石）を与えられ諸侯（大名）として処遇された。ただお家騒動の原因となった忠直の妾腹の次男、永見長良ながよしは八丈島に流罪となり飢死。同じく娘、関の子である小栗大六は切腹となった。この二人を除いて秀康の末裔は立藩し、明治維新の廃藩置県まで大名として存続した。次男忠昌の末裔は福居（福井）藩、3男、直政は直正系越前松平氏（松江藩。広瀬藩、母里もり藩）。5男、直基は直基系越前松平氏（川越、前橋藩）。6男、直良は直良系越前松平氏（明石藩）。改易後、光長の養嗣子宣富が津山藩。福居藩5代藩主松平光通みつみちの庶子、直堅なおかたは糸魚川藩の祖となった。今回秀康系大名を取り上げたが、秀康の次女（長女は早世）、喜佐姫きさひめが長州藩初代藩主毛利秀就ひでなりの正室となり、その子、綱広つなひろしは長州藩2代藩主となったように、この他にも多くの系統が存在する。それも又興味深いのだが、機会があればとりあげたい。